

手賀沼アグリビジネスパーク事業戦略プラン

令和7年3月

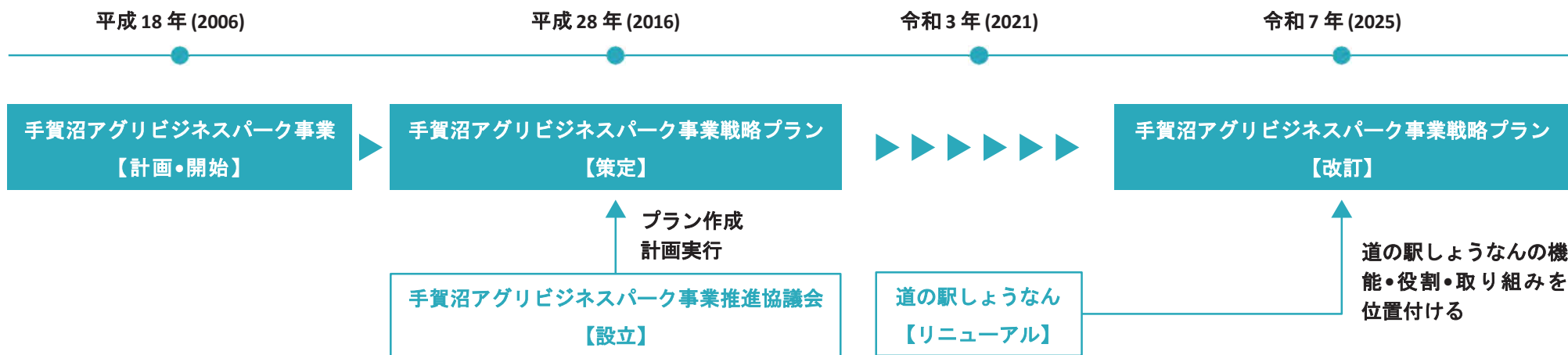
柏市農政課

0 本戦略プランの背景

手賀沼アグリビジネスパーク事業は、平成 18 年 3 月に策定された沼南地域整備方針の中で、「農業や観光・レクリエーションの振興による環境共生・交流の地域づくり」として位置付けられた計画事業です。平成 22 年度から、地域の農業者を主体に、地産地消や農業の六次産業化に向けた取り組みとして、収穫体験や体験農園、農家レストラン事業などが検討され、事業化されてきた。平成 28 年度には、事業を推進する母体として手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会を設立し、手賀沼アグリビジネスパーク事業戦略プランを策定。ハード整備、ソフト事業の両面から、地域の回遊性を高め、この地域全体の活性化を図っていくことを目的として活動してきた。

令和 3 年に、道の駅しょうなんがリニューアルオープンしたことで、道の駅を拠点に、地域の回遊性向上、農家と連携した農業体験プログラムの推進、事業者間のネットワーク構築の土台ができつつある。その一方で、農家の高齢化・耕作放棄地の増加といった課題は深刻化してきており、現況に合わせた戦略プランの改訂を行う。

新たな戦略プランでは、特に道の駅しょうなんを地域活性化の拠点・推進主体と位置付け、道の駅しょうなんが地域において果たすべき役割・機能、そして取り組むべきアクションを示し、道の駅しょうなんが率先して取り組んでいく事業、柏市が道の駅しょうなんと連携しながら推進していく事業、柏市や道の駅しょうなんのサポートを受け地域の事業者がチャレンジしていく事業、この 3 つを組み合わせながら、手賀沼周辺の農業振興と地域活性化を目指す。



1 手賀沼エリアの現状

令和3年の道の駅しょうなんリニューアルも含め、ここ数年の手賀沼エリアを取り巻く環境は、大きく変化しつつある。道の駅しょうなんを集客施設として、様々な事業者が活発に新たな取り組みを展開している状況であり、一方で全国的な課題と同じく、柏市の農業、手賀沼エリアの農業も、高齢化・後継者不足・耕作放棄地といった問題に悩まされている。本章では手賀沼エリアの現状を把握した上で、手賀沼エリアそして道の駅しょうなんがこれから持つべき視点を整理する。



手賀沼エリアの現状

① 農業生産力低下の危機

●農家の減少

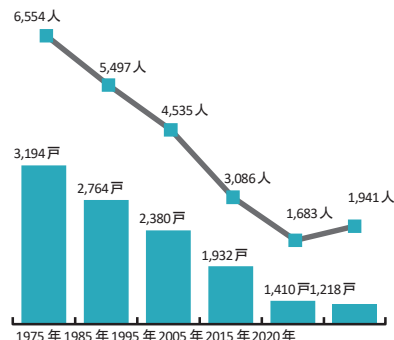
全国的な傾向と同じく、市内農業者は減少を続けており、道の駅しょうなんが開設された2005年から比べると約3分の2になっている。

●農家の高齢化

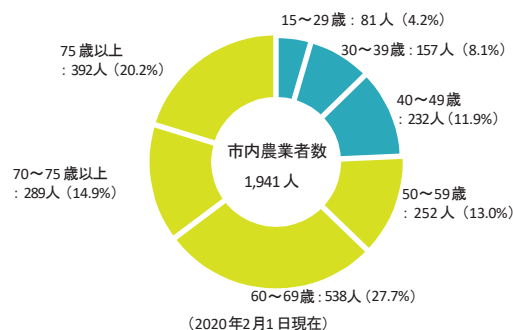
市内農業者の高齢化も顕著で、4分の3以上が50代以上、特に70代以上は3分の1を占めており、この5～10年で一気に農家が減る可能性がある。

●耕作放棄地の増加

農家の減少・高齢化に伴い、遊休農地が増えることが予想される。実際に手賀沼エリアにおいても、耕作できなくなった農地を、近隣農家に預ける等の例が増えてきている。



柏市内の農家軒数と農業従事者数



柏市内の年齢別農業者数

② 新たな農の担い手の登場

●企業参入の可能性

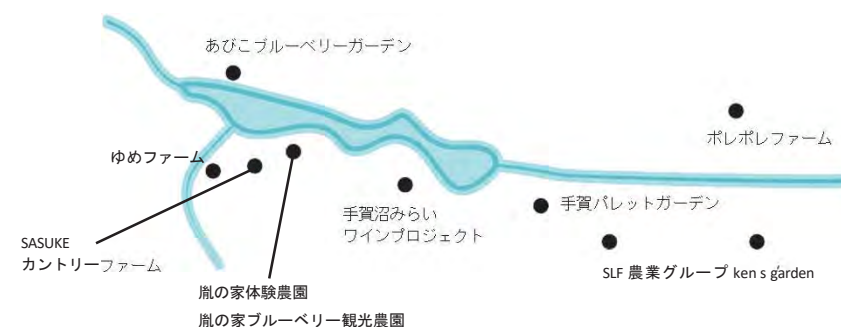
左グラフにあるように、農家軒数の減少に反し、農業従事者は増加している。これは企業による農業参入が影響していると考えられ、手賀沼でも福祉事業者が農業生産に取り組む等の例が見られる。

●市民の農に対する関心の高まり

農業に関わってみたい、自分で野菜を本格的に栽培してみたいという関心の高まりから、市民ボランティアによる援農や、市民団体による農地再生の取り組み等が見られるようになった。

●新規就農、兼業農家という選択肢

耕作されなくなった農地を新規就農者が副業として引き継ぐ、リタイア後の農地所有者が体験農園を始める等、新たな農業形態も生まれている。



手賀沼周辺の新規農業プロジェクト

手賀沼エリアで 取り組むべきテーマ

1. 地元農産物の確保

地元農産物を収益源としている道の駅しょうなんとしては、農家の減少、すなわち農産物の減少は、経営に関わる大きな懸念材料である。地域の農業生産力を維持する、さらに高めていく取り組みを考えていく必要がある。

2. 新たな農業生産方法の模索

手賀沼周辺で様々な農業のスタイルが生まれている状況を活かし、新たな担い手を取り込んだ農業生産を検討していくことが重要である。新規就農者の育成、企業との連携、道の駅しょうなんとしての農業生産等、可能性を探っていく必要がある。

手賀沼エリアの現状

③道の駅しょうなんの拡張リニューアル

・ファミリー層の来訪

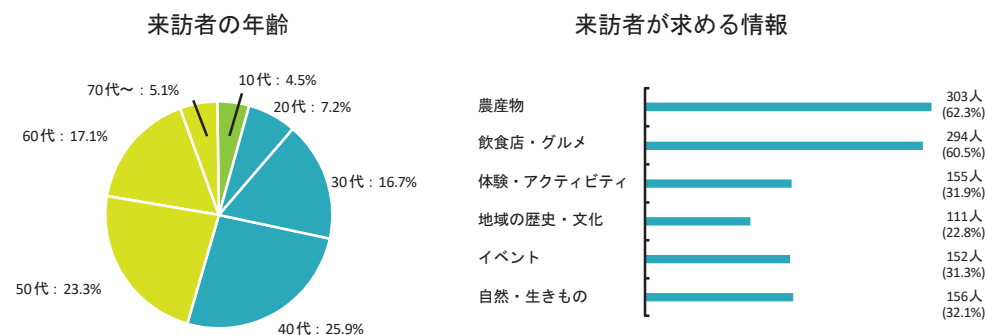
2021年のリニューアルオープンにより、来場者数が増加しただけでなく、これまでシニア層中心であった客層において、ファミリー層の来訪が増加している。

・地産地消のポテンシャル

ファミリー層に対して、地元農産物をしっかりとPRしていくことで、将来的な地産地消の土台を構築することが可能である。

・ニーズの多様化

道の駅しょうなん来訪者は、地元農産物の購入が大きな目的だが、同時にグルメへのニーズも高いことがわかっている。また、生きもの観察等の自然体験や農業体験といったアクティビティも求められている。



道の駅しょうなん来訪者アンケート（2024年）

④多様な農体験・自然体験の提供

・農業体験プログラムの挑戦

手賀沼周辺では、農菜土やわしのや農園といった体験型コンテンツを長年取り組んできたが、最近では、新規就農者が観光農園を始めたり、体験農園にチャレンジしたりと、体験プログラムを取り込んだ農業経営スタイルが見られる。

・レジャー施設の増加

ここ数年でキャンプ場や宿泊施設が開設され、手賀沼に終日あるいは泊まって滞在する方が増加している。事業者同士の連携により、こうした来訪者に、農体験や自然体験を提供することができている。

・飲食店による地産地消への参加

「手賀沼いちごスタンプラリー」や「手賀沼ブルーベリーサマー」では、多くの飲食店が地元農産物に関心を持って参加している。飲食店も巻き込んで地産地消を推進していくことで効果は大きくなると考えらる。



周辺のアウトドア施設

スタンプラリーでの地産地消推進

手賀沼エリアで 取り組むべきテーマ

3. アウトドアコンテンツの提供

アウトドアや自然体験のニーズが高まる中、農家や周辺事業者と連携し、地域で楽しめるコンテンツを提供していく姿が求められる。地域最大の集客施設である道の駅しょうなんが率先して取り組んでいくことで、交流人口の増加が期待できる。

4. 農業体験を軸としたファン作り

特に農業体験プログラムは、農・食への関心を高め、道の駅しょうなん・手賀沼のファン作りに効果があり、地産地消を推進する土台となって、直売所の売上向上や農に関わる関係人口の増加につながっていくものと考えられる。

2 手賀沼エリアの位置付け（柏市の政策における手賀沼）

本章では、柏市の様々な計画・施策の中での手賀沼の位置付けを整理する。農業・観光・環境のそれぞれの分野が目指すべき将来像の中で、道の駅しょうなんとして貢献できる部分、道の駅しょうなんが率先して取り組んでいくべき事業を検討する。道の駅しょうなんは、柏市の重要な農業振興拠点であると同時に、観光や教育、文化においても、大きな役割を果たし得ると考えており、それが手賀沼のファン作り、地産地消にもつながっていく。

【柏市の政策】

1. 柏市第6次総合計画
2. 柏市地方創生総合戦略
3. 柏市産業振興戦略ビジョン
4. 柏市都市農業振興計画
5. 地域計画
6. 農地等の利用の最適化の推進に関する指針
7. 柏市食育推進計画
8. 柏市観光基本計画
9. 柏市文化財保存活用地域計画
10. 柏市生きものの多様性プラン
11. 柏市緑の基本計画
12. 柏市環境基本計画



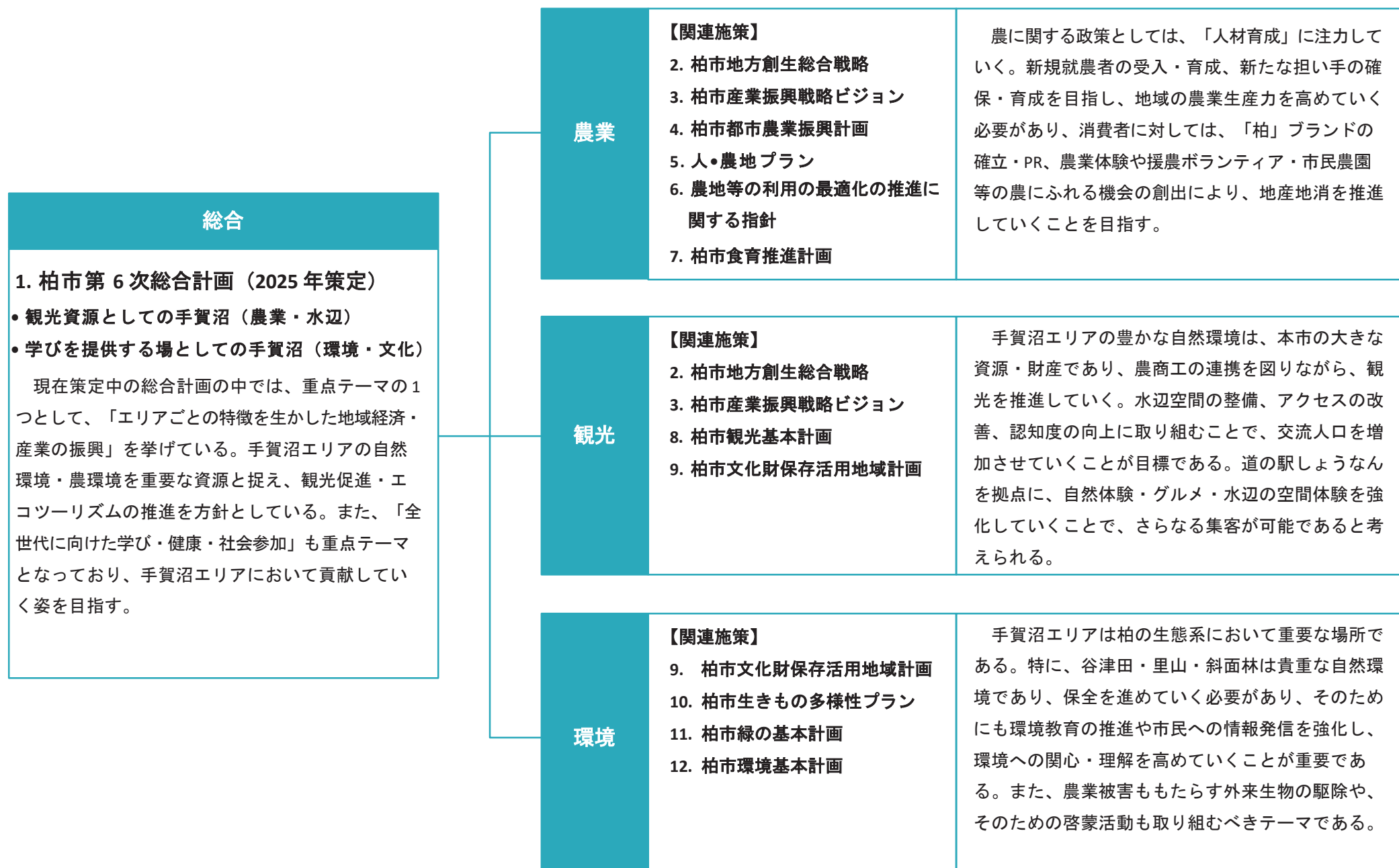
道の駅しょうなん
に求める
役割

農業

観光

環境

1. 地産地消の推進
2. 新たな担い手の育成
3. 農地保全・活用のサポート
4. 地域の回遊性向上
5. 歴史・文化・環境の情報発信
6. 教育への貢献



2. 柏市地方創生総合戦略（2019 年改訂）

- 手賀沼・東部地域を核とした観光・交流の創生
- 柏農業の販売促進（ブランディング）

農業

観光

「行きたい・住みたい・選ばれ続けるまち・柏市」を将来展望として掲げた地域活性化の戦略。道の駅しょうなんには、地元農産物の販売促進だけでなく、観光推進の拠点としての役割も求められている。

3. 柏市産業振興戦略ビジョン（2023 年改訂）

- 農業・商業・工業との連携の推進による観光施策の実施
- 手賀沼アグリビジネスパーク事業の実施

農業

観光

柏市が目指す産業の基本理念として「先端産業と地域産業をむすび、産業振興を通じて新たな価値を生み出す価値創出都市『柏』」を掲げている。目標値として、道の駅しょうなんの年間来場者数を 160 万人としている。

4. 柏市都市農業振興計画（2026 年改訂予定）

- 即戦力となる人材育成プロジェクト
- 農業サポーター制度の創設による労働力確保

農業

将来像として「生産者も消費者も笑顔になる持続可能な都市農業」を掲げた計画。道の駅しょうなんでは、政策と連動した新規就農者の育成、農業サポーターの運営が考えられる。



5. 地域計画（2025 年策定）

- 新規就農者の受入
- 農地集積の推進

農業

地域・集落が抱える人・農地の問題を解決するための「未来の設計図」として定めたプラン。道の駅しょうなんには、手賀沼エリアにおける新規就農者の受入・育成、周辺地区での農地のマッチング・集約への貢献を期待している。

6. 農地等の利用の最適化の推進に関する指針（2023 年改正）

- 遊休農地の削減、農地利用集積率の向上
- 新規参入経営体数の増加

農業

柏市農業委員会が策定した、持続可能な農業を推進していくために定められた指針。目標達成に向けては、個々の農家による取り組みだけでは難しく、生産者の集まりである道の駅しょうなん出荷者会との連携が必要となる。

7. 柏市食育推進計画（2026 年策定）

- 柏産農産物の購入率向上
- 農業ボランティア制度、市民農園支援事業の推進

農業

「食卓から始まる、健やかで元気なまち」をスローガンとして掲げた計画。市民が農業とふれあう機会・環境を構築することを目指しており、道の駅しょうなんは拠点として役割が期待される。

道の駅しょうなんに
求める役割

①地産地消の推進

地元農産物の魅力を発信・PRし、地域での消費を促す機能が重要である。市民が農にふれる・知る機会を積極的につくっていく姿を求める。

②新たな担い手の育成

柏市の農業振興の 1 つの拠点として、人材育成への貢献を求める。出荷者会と連携し、農業で新たなチャレンジができる環境・体制の強化を期待する。

③農地保全・活用のサポート

地域の農地保全に積極的に関わる姿勢を求める。援農や体験農園、谷津田・里山の保全活動等、市民を巻き込んだ取組へのサポートも期待する。

手賀沼エリアの位置付け（柏市の政策における手賀沼）

8. 柏市観光基本計画（2024 年策定）

- 手賀沼及び手賀沼周辺地域における観光振興
- 水辺空間の整備、アクセスの改善、認知度の向上

観光

「最重要分野」として、手賀沼エリアを位置付けており、道の駅しょうなん周辺の水辺の賑わいづくりに加えて、北柏エリアをはじめとしたエリア間の連携強化も目指している。

9. 柏市文化財保存活用地域計画（2023 年認定）

- 歴史・文化の情報発信、体験プログラム化
- 谷津田の保全

観光

環境

手賀沼エリアでは、農村の文化的景観を守るためにも、その価値を伝え・発信していくことが重要である。この地域特有の谷津田景観は貴重であり、農業の維持が難しい中、観光・環境の視点で保全に取り組む必要がある。

10. 柏市生きもの多様性プラン（2022 年改訂）

- 学校における環境教育の拡充
- 谷津田・里山の保全
- 外来生物の駆除・啓蒙活動

環境

「学校における環境教育の拡充」が施策の1つとして位置付けられており、身近な自然環境を知り、探求心を芽生えさせるための取り組みを求めている。情報発信・啓蒙活動の拠点として、集客施設としての道の駅しょうなんの活用が考えられる。

11. 柏市緑の基本計画（2020 年改訂）

- 斜面林の整備
- 農地を活かした交流拠点づくり

環境

柏を特徴づける要素となっている斜面林の保全を施策に挙げている。また、手賀沼周辺の田畑を活かして、農にふれられる・体験できる拠点づくりも目指している。

12. 柏市環境基本計画（第三期）2026 年改訂予定）

- 環境学習の推進
- 環境問題を解決するための能力の育成

環境

重点プロジェクトの1つとして、「環境学習の推進」が位置付けられており、未就学児から全ての世代に対して環境学習を行うとともに、学校における環境教育の支援も目指している。

道の駅しょうなんに
求める役割

④地域の回遊性向上

道の駅しょうなんを手賀沼の玄関口として、収穫体験等の農を軸としたコンテンツによって、地域に滞在する・回遊する環境の構築が求められる。

⑤歴史・文化・環境の情報発信

多くの来訪者がある道の駅しょうなんを活かし、地域の歴史・文化を伝える、環境への関心を高める情報発信の取組が求められる。

⑥教育への貢献

食育体験や環境学習のフィールドとして手賀沼は大きなポテンシャルを持つ。道の駅しょうなんには、それらを積極的にリードしていく姿が求められる。

3 これまでの取組

平成 28 年に協議会が設立されて以降、様々な取り組みを行ってきた。そのほとんどが、実験的なアクションであり、実際にやってみることで、どんな効果があるか、誰にメリットがあるか、何が課題かが見えてきた。そこから継続的に運営・展開していくためのヒントが得られる。こうした最初の一步を仕掛けることが協議会の大きなミッションであり、それによって事業者が継続できる環境を構築できていると言える。本章では、これまでの協議会及び関連する道の駅しようなんの取り組みをテーマごとに整理し評価を行う。

【これまでの協議会の取り組み】

- ①情報発信
- ②道の駅しようなん活用イベント
- ③農業体験プログラム
- ④地域回遊型イベント
- ⑤水辺の拠点プログラム
- ⑥鷺野谷地区活性化プログラム



柏市が予算化して
取り組んでいくべき事業

各計画・各施策に基づいて実施
▷ 担当課が予算化して推進

道の駅しようなんが率先して
取り組んでいくべき事業

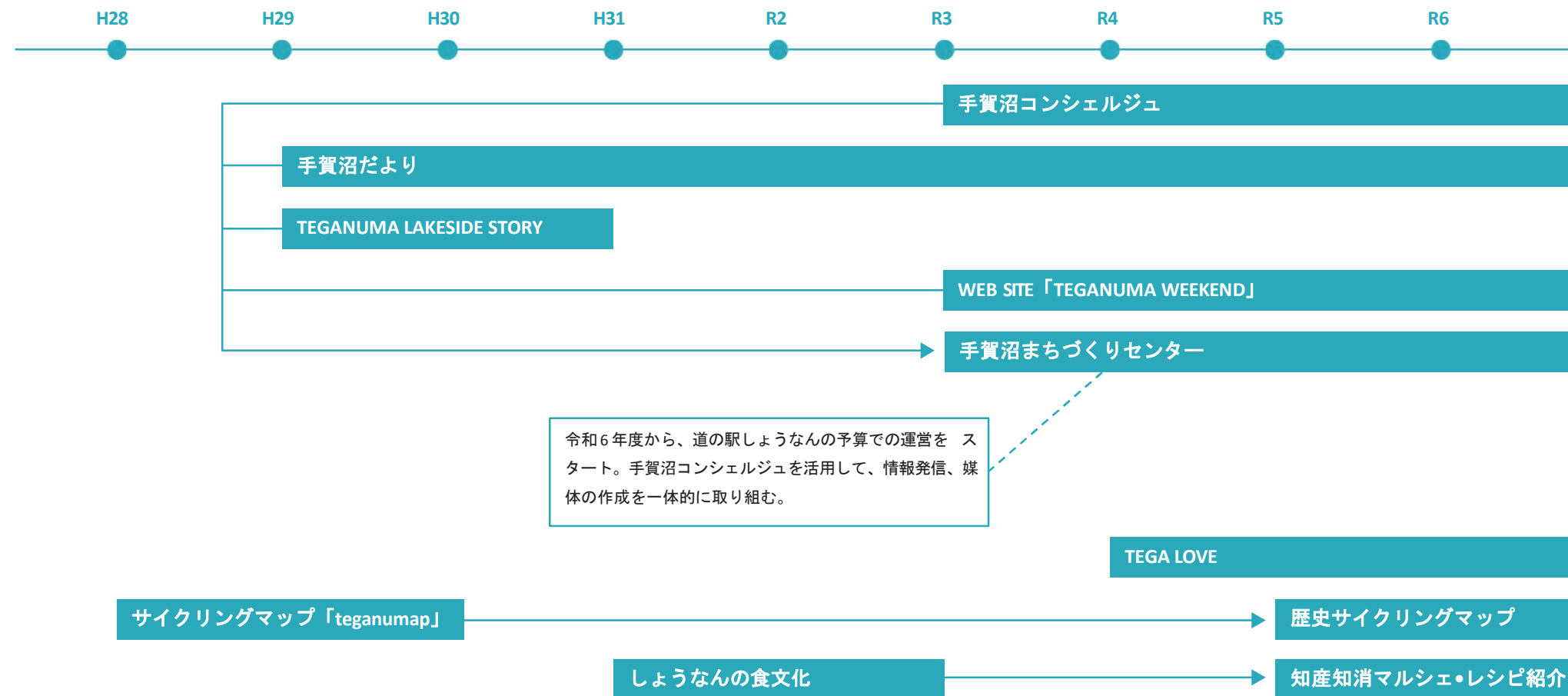
戦略プランに位置付けて実施
▷ 基本方針／基本施策

民間事業者が自走して
取り組んでいける事業

自走化に向けたトライアルやサポートを実施
▷ 各計画・各施策の進捗に応じて予算化

① 情報発信

誘客やファン作りにおいては重要な情報発信だが、それ自体では収益を生まないため、継続的に展開していくためにはメリットのある企業と連携していく必要がある。道の駅しょうなんでは、インフォメーションセンター機能を担う「手賀沼まちづくりセンター」に業務を集約し、道の駅の施設案内と地域の情報発信を掛け合わせることで、効率よく持続していく形を見出した。また、TEGA LOVE も、関心を持つ企業と連携することで、発展的な展開を目指している。



情報発信 1-1	【取組】 手賀沼コンシェルジュ	【実施年度】 令和3年 12 月～	【活用予算】 令和3年 12 月～：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会） 令和6年 4 月～：道の駅しょうなん独自予算／年間4,500,000円
【内容】 令和3年の道の駅しょうなんリニューアルの際に新設。てんと棟に設けられたインフォメーションブースにて、地域住民（主に地元の子育て中のママ）をコンシェルジュとして配置し、施設案内だけでなく、地域の情報発信も行う。手賀沼だより等の取材、スタンプラリー等のイベントの運営サポートも実施している。			【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：○ 環境保全：－ 地域に開いた窓口を設けることで、お客様の声もしっかりと集めることができています。また、農家や事業者から、企画の相談を持ち込まれることもあり、ヨガや星空観察会が実際に実現されている。道の駅しょうなんとして、インフォメーションコーナーに配置する人材を最大限に活用し、地域の回遊拠点として機能することが重要である。
情報発信 1-2	【取組】 手賀沼だより	【実施年度】 平成29年 11 月～	【活用予算】 平成29年 11 月～：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会） 令和6年 4 月～：道の駅しょうなん独自予算／年間650,000円
【内容】 毎月手賀沼周辺でのイベント情報を発信する媒体。市内の公共施設中心に配架している。裏面は「手賀沼の案内人」と題し、手賀沼で活動する農家・飲食店・事業者・市民団体等を紹介。農業や食だけでなく、環境保全の取り組み等も発信している。手賀沼コンシェルジュが取材・作成・配布等を担っている。			【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：○ 環境保全：△ 協議会で始めた情報発信の取り組みを手賀沼コンシェルジュを活用することで、人材・予算、両方の面で効率よく運営できている。地域の情報が道の駅しょうなんに集まる仕掛けとなっている。市内全域で配布できていることで、手賀沼に訪れるきっかけを生む効果もある。
情報発信 1-3	【取組】 TEGANUMA LAKESIDE STORY	【実施年度】 平成29～30年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／4,000,000円
【内容】 手賀沼の魅力を紹介するムービーを作成。テーマごとに1分の動画を21本作り、四季折々の手賀沼を紹介している。YouTubeで公開している他、地域の住民向けにはDVDを配布。道の駅しょうなんロビーのサイネージでも流している。			【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：○ 環境保全：△ 手賀沼エリアの特徴や魅力をわかりやすく紹介している。道の駅しょうなん・てんと棟ロビーでは、休憩しながら多くのお客さんが動画を見ており、手賀沼のPRに繋がっている。DVDや掲載場所を紹介したパンフレットも、道の駅しょうなんリニューアル後、約1,000部配布した。取材先の店舗や事業者とのネットワーク構築ができたことも大きな成果である。

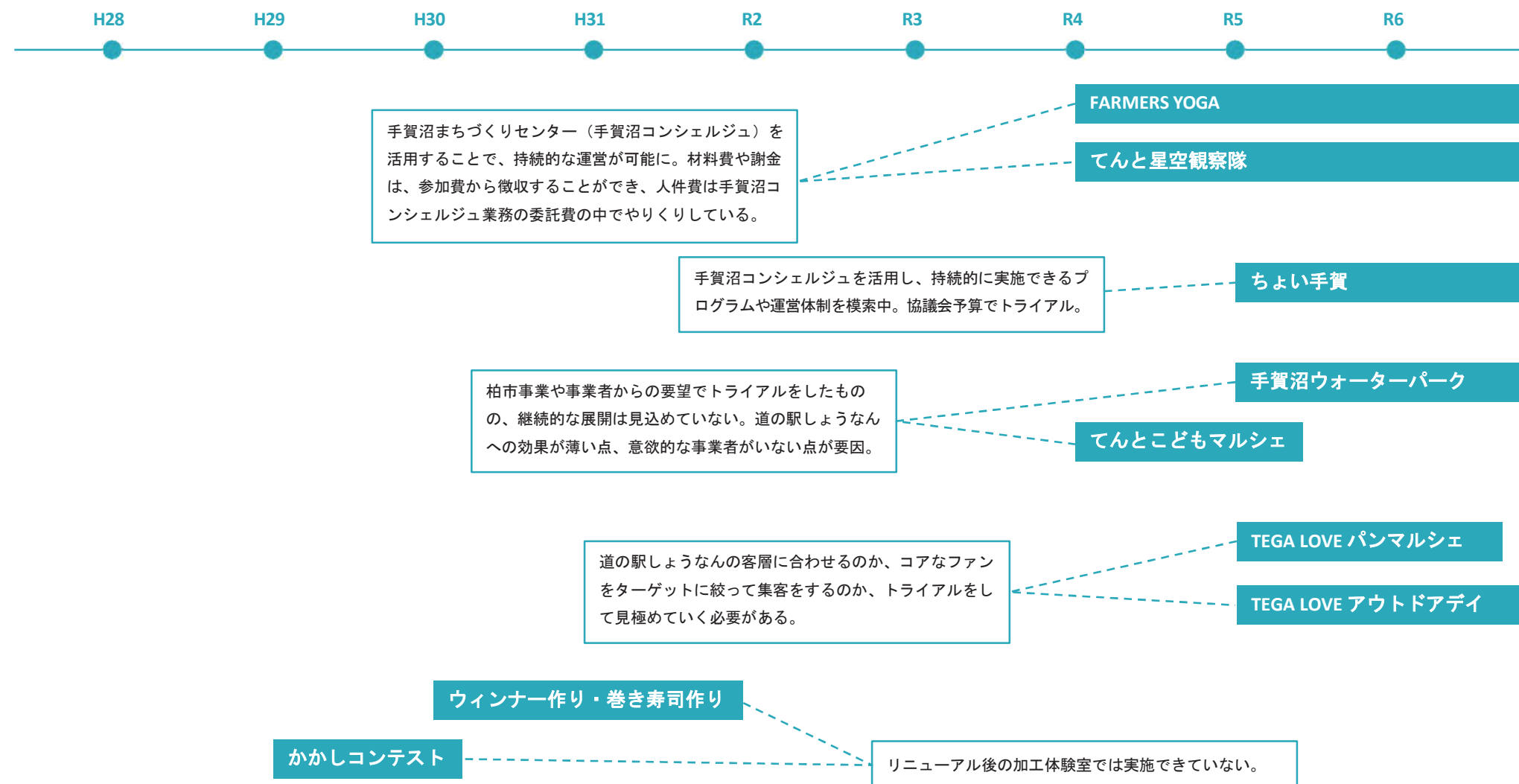
情報発信 1-4	【取組】 WEB SITE「TEGANUMA WEEKEND」	【実施年度】 令和3年度～	【活用予算】 令和3年4月～：柏市事業 令和6年4月～：道の駅しょうなん予算／年間400,000円 (令和6年3月：観光庁補助事業を活用してリニューアル／1,000,000円)
【内容】 令和3年に、協議会のHPを一新し、手賀沼の魅力を伝えるウェブサイト「TEGANUMA WEEKEND」として構築。合わせてSNS（主にInstagram）での発信にも力を入れた。令和5年度には、観光庁「インバウンドの地方誘客や消費拡大に向けた観光コンテンツ造成支援事業」を活用して、大幅にリニューアル。		【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：○ 環境保全：－ 元々は協議会の目的や活動を紹介しているHPであったものを、手賀沼の魅力を伝える媒体として作り替えることで、情報発信プラットフォームとしての機能を強化することができた。令和4年からは、手賀沼コンシェルジュを活用し、SNSと連動させて管理・運営することで、イベント情報の発信だけでなく、受付・予約・問い合わせ対応まで一貫して行うことができています。道の駅しょうなんが担うべき地域の情報発信の土台を構築することができています。	
情報発信 1-5	【取組】 TEGA LOVE	【実施年度】 令和4年度～	【活用予算】 令和4年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／5,500,000円 令和6年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／2,000,000円
【内容】 道の駅しょうなんのリニューアル後、ファミリー層をターゲットにした手賀沼のガイドブックを制作。手賀沼周辺の飲食店や施設を紹介し、地域での回遊性向上を目指すと同時に、手賀沼でのライフスタイルを提示することで、手賀沼のファンを増やすことも大きな狙いである。		【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：○ 環境保全：△ 令和5年3月に発行したTEGA LOVEは好評を得て、4万部は1年半で配布を完了した。令和6年度の予算で増刷を行い、令和7年3月に2万部を増刷。今後も定期的に情報を更新しながら増刷することで、手賀沼のファン作りに貢献することができる。TEGA LOVE発行を機に、事業者との連携体制も構築することができ、「TEGA LOVE パンマルシェ」や「TEGA LOVE アウトドアデイ」等の合同イベントの実施にもつながっており、地域活性化に寄与する取組である。	
情報発信 1-6	【取組】 サイクリングマップ「teganumap」	【実施年度】 平成28年度	【活用予算】 平成28年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／1,000,000円
【内容】 手賀沼を散策するためのサイクリングマップを作成。テーマを「週末の女子旅」と設定し、女性目線でのおすすめスポットを紹介した。マップ制作にあたっては、ワークショップを実施し、女性から見た手賀沼の魅力や紹介したいスポットを整理した。		【効果】 農業振興：－ 回遊性向上：○ 環境保全：－ レンタサイクルを使って巡るルートを提案しており、道の駅しょうなん来訪者には好評を得た。道の駅しょうなんリニューアル後、レンタサイクルの利用者は増えており、こうしたマップによって回遊性の向上に貢献することができる。令和6年度には、歴史をテーマに新たなサイクリングマップを作成し、継続して取組を展開している。	

【情報発信】 1-7	【取組】 しょうなんの食文化 【実施年度】 平成31年度・令和2年度	【活用予算】 道の駅しょうなん予算／500,000円
【内容】 手賀沼周辺地域の郷土料理を紹介するパンフレットを作成。農家に伝わるレシピを教えてもらい、紹介している。これまでに制作したのは、かき餅・漬物・ばらっぱ饅頭。同じかき餅でも農家によって作り方や味が違うため、それぞれの地域でのレシピを紹介している。  【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：－ 道の駅しょうなんが独自に企画し実施した。手賀沼エリアの郷土料理を知ってもらう機会になるだけでなく、農家を身近に感じることのできる媒体にもなっている。道の駅しょうなんには100軒を超える出荷者があり、こうしたレシピはたくさん取り上げることができ、魅力的なコンテンツとして期待できる。 一方で、これまで十分にPRができていない取組でもあり、直売所で販売している商品と並べて掲示する等して活用することで、更なる効果が見込める。		
【情報発信】 1-8	【取組】 手賀沼まちづくりセンター 【実施年度】 令和3年12月～	【活用予算】 各コンテンツごとに予算を活用
【内容】 令和3年12月に開設した道の駅しょうなん・インフォメーションセンターを「手賀沼まちづくりセンター」と称して、様々な企画を運営。協議会主催のイベントや、協議会発行の媒体は全て、この名前を使って取り組んでいる。地域の農家や事業者に対しても、この名称でやり取りすることで、各コンテンツを連動させて実施することが狙い。  【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：○ 環境保全：△ HP・SNS・手賀沼だよりでの情報発信に加え、はじめてのはたけ、FARMERSYOGA、てんと星空観察隊等、様々な取り組みを来訪者に一体的に見せることができています。加えて地域の農家や事業者に対しての窓口としても機能しており、企画の相談やイベントの連携の依頼等が寄せられる。道の駅しょうなんがプラットホームとなり、手賀沼エリアの活動主体が連携する姿、それによって地域活性化が進められる姿が期待できる。		
【情報発信】 1-9	【取組】 手賀沼・歴史サイクリングマップ 【実施年度】 令和5年度～	【活用予算】 令和5年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／200,000円 令和6年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／100,000円
【内容】 令和5年度にもサイクリングマップを作成。道の駅しょうなんから近い、鷺野谷地区・大井地区を対象にし、「歴史」をテーマにしたルートを紹介している。ターゲットを女性にし、女性目線での魅力発信、無理なく回れる距離を考慮して、ルートを設定した。令和6年度には、そのルートをガイド付きで巡るサイクリングツアーも開催した。  【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：○ 環境保全：△ 道の駅しょうなんのリニューアル後、レンタサイクル利用者は増えている。また、インフォメーションセンターには、自転車で巡れるスポットの問い合わせが多く、お客様が気軽に巡れるサイクルマップは、重宝されている。地域の歴史にふれてもらうという点でも意義がある取組である。他のエリアのルート開発や、定期的なガイド付きツアーの開催等、今後の展開が期待できる。		

情報発信 1-10	【取組】 知産知消マルシェ・レシピ紹介	【実施年度】 令和5年度～	【活用予算】 令和5年：道の駅しょうなん独自予算
【内容】 専門家に依頼し、旬の農産物のレシピを紹介している。直売所への掲示の他、レシピを紹介する専用のSNSアカウントも開設し、定期的に発信。令和6年度には、一般公募でのレシピコンテストも開催した。 カブのステーキ  大根のみぞれ鶏肉煮 			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：－ 農産物の購買を促進するためには効果的な取り組みである。特に直売所のリピーターに対しては、常に新しい食べ方や調理方法を提示することで、通いたくなる店舗づくりにつながる。レシピコンテスト等の、お客様が参加できる形のイベントも、裾野を広げるといって、重要な役割を担う。

②道の駅しょうなん活用イベント

道の駅しょうなんの来訪者の満足度向上・リピーターの獲得に向けてはイベント実施が効果的だと考えられるが、収益を生むことは難しく、各イベントごとに低予算で実施する方法、予算をかけてもよいと判断するメリットが求められる。「FARMERS YOGA」と「てんと星空観察隊」は、手賀沼まちづくりセンターの予算を活用し、定期開催により毎回の運営負担を小さくしていることで継続できている。



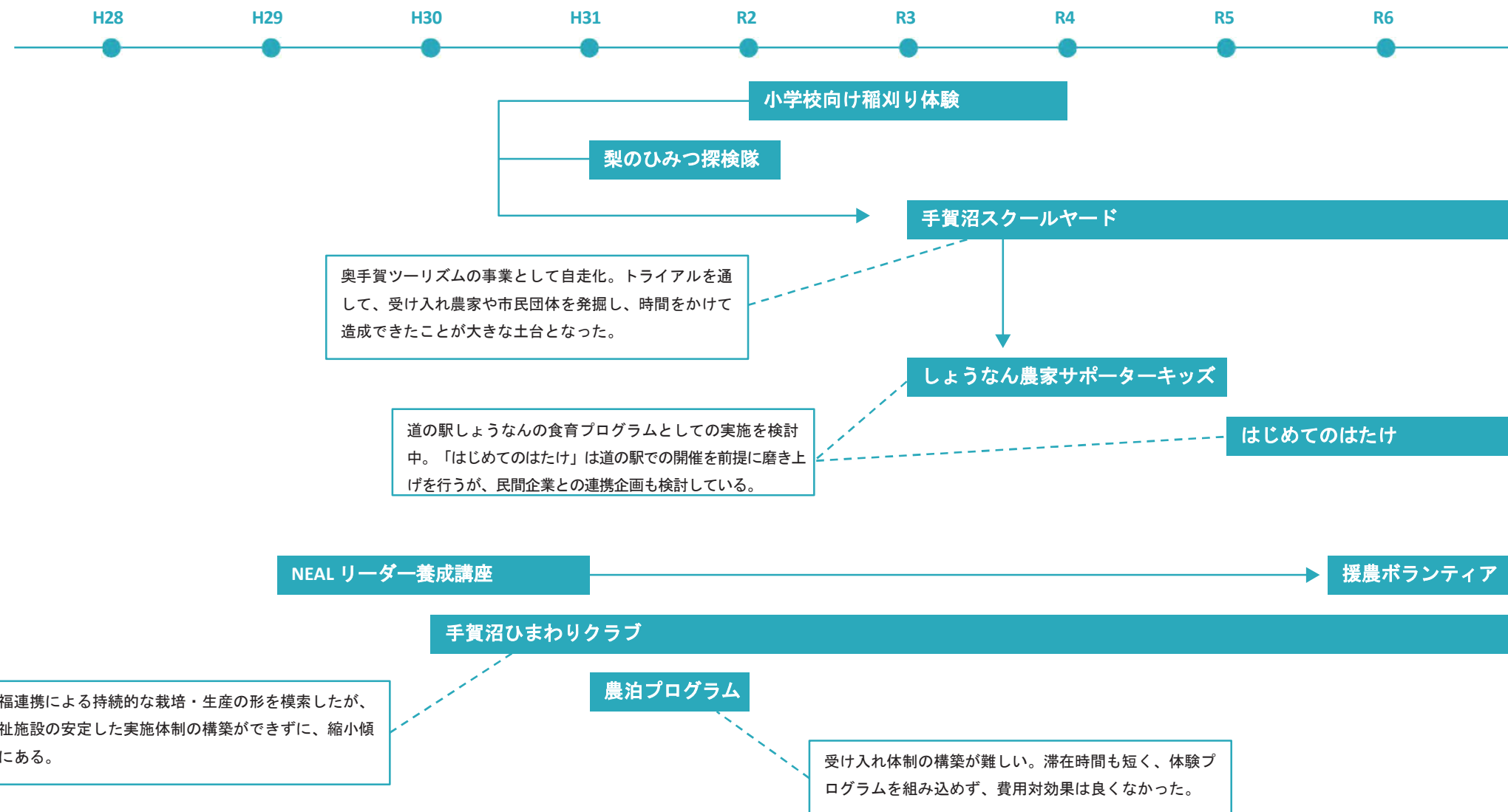
イベント 2-1	【取組】 FARMERSYOGA	【実施年度】 令和4年9月～	【活用予算】 令和4年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／200,000円 令和5年～：協議会の独自事業（参加費にて運営）
【内容】 出荷者から提案があって開始した、芝生ひろばでのアウトドアヨガ。令和4年度に実験的にスタートし、令和5年度からは毎月第三木曜日に開催している（臨時で祝日開催する時も）。ヨガの後に、旬の農産物を味わう時間を設けており、道の駅しょうなんや周辺の飲食店のスイーツや加工品を提供している。			【効果】農業振興：○ 回遊性向上：△ 環境保全：－ 参加者は5～10名程度の小規模な取り組みであるが、講師謝金と提供するスイーツやお土産の農産物の費用は、参加費によって賄えている。手賀沼コンシェルジュの運営費（イベント実施分の人件費）があることで、持続して実施できている。参加者同士の交流が生まれ、コミュニティが育まれており、手賀沼のファン作りにつながる取り組みである。こうした定期的に道の駅に通うような企画は、他のテーマでも展開可能性がある。また、周辺の飲食店や農家の紹介にもなっており、実際に足を運ぶ参加者も多く見られる。
イベント 2-2	【取組】 てんと星空観察隊	【実施年度】 令和4年10月～	【活用予算】 令和4年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／200,000円 令和5年～：協議会の独自事業（参加費にて運営）
【内容】 芝生ひろばで開催している星空観察隊。市民団体「東葛星見隊」からの提案でスタート。道の駅しょうなんで年4回、手賀沼フィッシングセンターで年2回、計6回開催している。毎回、旬の農産物のおやつを提供している。			【効果】農業振興：△ 回遊性向上：－ 環境保全：○ 手賀沼の環境を活かしプログラムとして好評を得ている。固定のファンが生まれており、大きなPRを打たなくても、集客が可能なコンテンツとなっている。参加費によって、講師謝金やおやつ代を賄っている。FARMERSYOGAと同様に、手賀沼コンシェルジュの運営費（イベント実施分の人件費）があることで、持続して実施できている。天候により開催できない場合がある点が課題であるが、遠方から集客するコンテンツではないため、中止により参加できなかった方には、次回開催時の優先案内を行っている。
イベント 2-3	【取組】 ちょい手賀	【実施年度】 令和5年度～	【活用予算】 令和5年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／1,000,000円 令和6年：協議会の独自事業（参加費にて運営）
【内容】 予約なしで手軽に参加できる体験プログラムを「ちょい手賀」として開発した。梨ジュース作りやいちご大福作りといった農産物を使った料理体験、ハンドクリーム作りやハンカチ染めといったクラフトワークショップ等、加工体験室で実施できるコンテンツを検討した。収穫祭や創業祭等の、大型イベント時にトライアルを行った。			【効果】農業振興：○ 回遊性向上：△ 環境保全：－ 令和5年度に検討・開発したプログラムを、令和6年度より参加費徴収によって運営できている。ただ、この取組も手賀沼コンシェルジュの運営費（イベント実施分の人件費）があることで持続して実施できている。道の駅という施設の性質上、ふらっと立ち寄るお客様が多いため、こうしたその場で気軽に体験できるプログラムは、施設にとっての付加価値となる。常時いくつかのプログラムを用意できれば理想的であり、今後はその体制構築に期待したい。

イベント 2-4	【取組】 手賀沼ウォーターパーク	【実施年度】 令和5年度～	【活用予算】 令和5年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／4,000,000円 令和6年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／500,000円
【内容】 道の駅しょうなんで提供できる水上アクティビティを開発。道の駅に隣接する栈橋を活用し、ポートによる観光クルーズ、SUP、フロートバイクを実験的に実施した。恒常的なコンテンツ提供は難しく、「手賀沼ウォーターパーク（令和6年度はミズソラパーク）」として開催日を設け、イベントとして実施した。			【効果】農業振興：－ 回遊性向上：△ 環境保全：△ 実験的なイベントにより、手賀沼での水上アクティビティへのニーズはある程度あると把握できた。観光クルーズは、地域の事業者が独自に実施しており、今後も展開可能である。SUPに関しては、市民団体が定期的に運営できる可能性があるが、フロートバイクは民間事業者での運営は難しく、今後の活用は検討が必要である。道の駅しょうなんがイベント予算を組んで、年間で数回実施する形が望ましいが、農業振興のイベントや、道の駅敷地内のイベントよりは、優先度は低い。
イベント 2-5	【取組】 てんとこどもマルシェ	【実施年度】 令和4年3月・12月	【活用予算】 令和4年3月：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／150,000円 12月：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／300,000円
【内容】 食育をテーマにしたイベント。令和4年3月に、小学校と連携し、かぶの販売会を実施。料理教室やクラフトワークショップも開催した。それを受け、子育てサークルから連携して開催したいと相談があり、12月に2回目を開催した。加工体験室での料理体験の他、芝生ひろばでの遊びコーナー、音楽コーナー等を設けた。			【効果】農業振興：△ 回遊性向上：－ 環境保全：－ 小学校や複数の子育てサークルと連携して実施したが、団体によって食育への考え方や取り組みが異なり、1つのイベントとして継続することは難しいと判断した。小学校によるかぶの販売会は、その後も毎年実施しており、継続は可能である。芝生ひろばでの遊びコーナーや音楽イベントは、道の駅しょうなんとして、事業者への委託や柏市事業での開催等、様々な形態で展開している。
イベント 1-6	【取組】 TEGA LOVE パンマルシェ	【実施年度】 令和5年11月	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／300,000円
【内容】 ガイドブック「TEGA LOVE」発行を機に、掲載店からパンマルシェを開催したいと提案があり実現。手賀沼周辺の6店舗が参加し、開催した。当日は天候に恵まれず、道の駅しょうなん自体の来場者も少なめであったが、マルシェには人が流れ、賑わいを見せた。			【効果】農業振興：△ 回遊性向上：○ 環境保全：－ 今回は地域の店舗を紹介して回遊性を高めることが狙いであり、このマルシェを機に店舗へ足を運ぶ方も見られたことから、ある程度効果があったと考えられる。一方で、道の駅しょうなんの集客イベントとして、集客力のある店舗を誘致して開催する方法もあり得る。今後開催するにあたっては、どちらを主目的にするか検討が必要である。

イベント 1-8	【取組】 TEGA LOVE アウトドアデイ	【実施年度】 令和6年3月	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／300,000円
【内容】 冬季の芝生ひろば活用イベントとして、実験的に実施。周辺のキャンプ場4店舗に参加してもらい、道の駅来訪者が気軽に楽しめるアウトドアコンテンツ（ニジマス焼き、テント体験、薪割り体験等）を提供。手賀沼周辺でのアウトドアの魅力を紹介することで、手賀沼への再来訪を促すことを目指した。			【効果】 農業振興：－ 回遊性向上：△ 環境保全：－ 子ども向けのワークショップのブースは非常に集客もよく賑わいを見せた。道の駅しょうなんで開催するアウトドアコンテンツとしては、子ども向けの「ちょい手賀」としての展開が望ましい。逆に、アウトドアやキャンプに関心のある方が来場する姿は少なく、キャンプ場からのニーズとはマッチしない部分が見られた。キャンプやアウトドア好き向けのイベントとして打ち出していく場合は、企画内容を検討する必要がある。
イベント 1-9	【取組】 ウィンナー作り・巻き寿司作り	【実施年度】 平成30年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／300,000円
【内容】 地域の食材や人材を活用した料理教室を開催。道の駅しょうなんリニューアル後の加工体験室活用を見据えて開催した。ウィンナー作りは、地元のブランド豚「幻霜ポーク」を使った体験で、非常に好評であった。 巻き寿司作りは、地元の婦人会が、郷土料理の継承の一環で取り組んだ。どちらも、沼南福祉センター調理室が会場。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：－ ウィンナー作りも巻き寿司も、道の駅しょうなんリニューアル後は実施できていない。コロナ禍で事業者・婦人会ともに活動環境が変わってしまったことが要因である。 一方で、リニューアル後、他の事業者が加工体験室を活用し、パフェ作りやコーヒー講座、寿司教室等を開催している。この事業での受け入れ体制の構築が土台となって展開できており、トライアルとしては価値のある取組であった。
イベント 2-9	【取組】 かかしコンテスト	【実施年度】 平成29年10月	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／200,000円
【内容】 かかしの制作は手賀沼フィッシングセンター及び手賀近隣センターで実施。参加者がユニークなかかしを制作し、10月の道の駅しょうなん・収穫祭時に展示を行った。協議会発足直後の取り組みとして、農家と市民の交流を促すことが狙い。			【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：－ 環境保全：－ 農家との交流を目指した企画であったが、実際は制作ワークショップに時間と労力を割かれた。スタッフの負担が大きく、参加者数も1日で10名程度の受け入れが限度であり、なかなか収益事業としては見込めなかった。農家からの評判はよかったため、地域の農業を理解することのできるプログラムとしては価値はあると言える。

③ 農業体験プログラム

手賀沼エリアとして力を入れてきたテーマだが、推進する中心的事業者の存在が重要である。「手賀沼スクールヤード」は、開発時点から民間事業者としての自走の形を目指していたため、トライアルや検証を効果的に実施でき、持続的な展開につながっている。「はじめてのはたけ」や「援農ボランティア」に関しては、採算のとれる事業ではないが、今後の農業振興にとって必要な取組であると考えている。



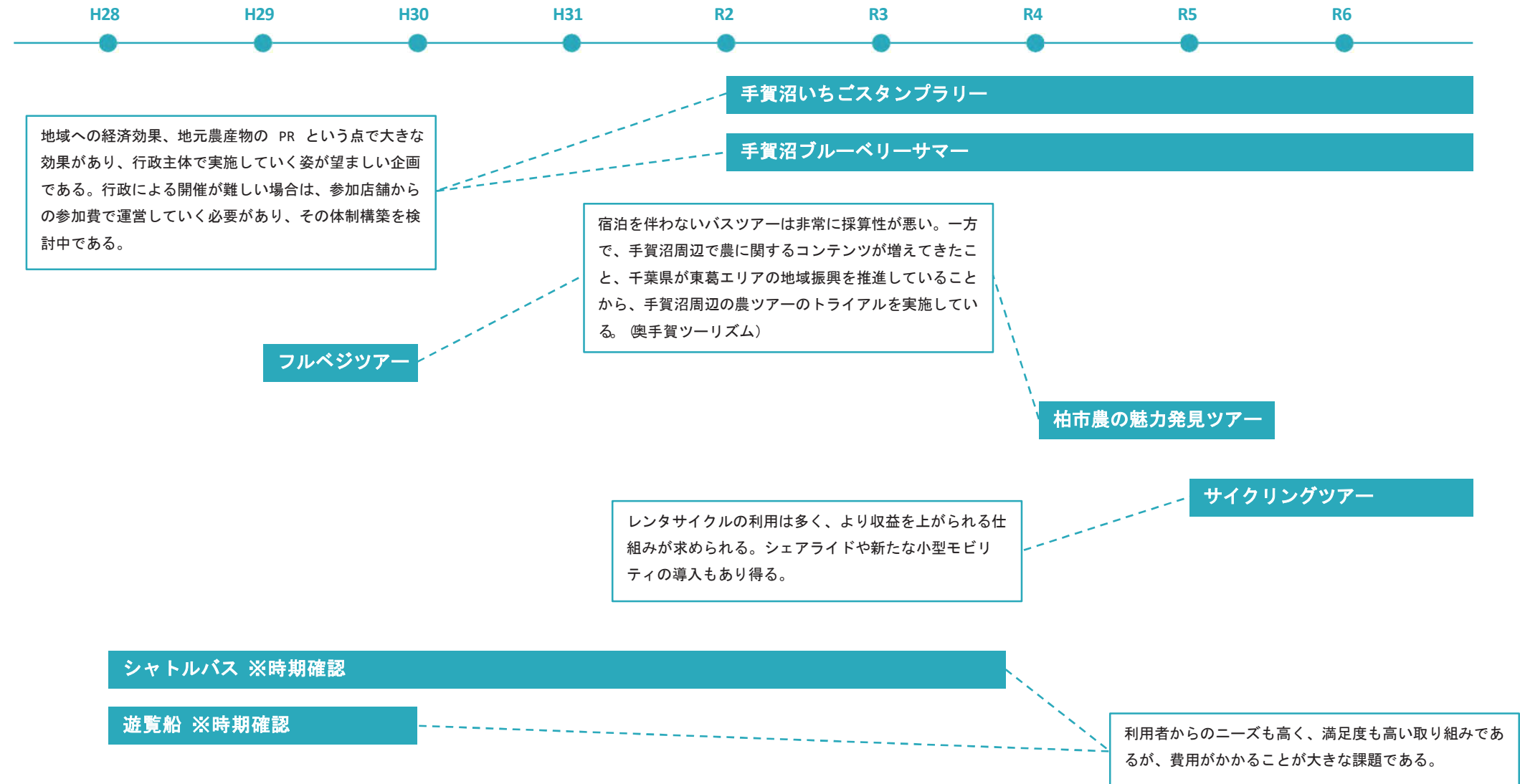
農業体験 3-1	【取組】 小学校向け稲刈り体験	【実施年度】 令和2年度・令和3年度	【活用予算】 令和2年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／1,200,000円 令和3年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／3,000,000円
【内容】 小学校を対象にした農業体験プログラムとして、稲刈り体験を実施した。令和2年度に、小学校からの要望があり、トライアルとして実施。それを受け、令和3年度には、教材や運営マニュアル等、持続的に開催していくための体制構築を試みた。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：△ 「手賀沼スクールヤード」の土台となった取組である。この2年間で稲刈り体験を実施したことで、小学校のニーズを把握することができ、他の農産物の収穫体験や、里山や水辺での環境学習プログラムへと展開させることができた。 稲刈り体験は小学校5年生のカリキュラムとも合致しており、秋の校外学習の定番として、その後も農家自身で受け入れを行っている。一方で、受け入れに適した時期は短く、その間に受け入れが可能な学校数は限られてしまう点が課題である。
農業体験 3-2	【取組】 梨のひみつ探検隊	【実施年度】 平成31年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）にて一部費用負担／200,000円
【内容】 子ども向け科学教室を開催している市民団体KSELの取り組みのサポートを行った。梨の摘果の時期（5月）と収穫時期（9月）の2回にわたる講座で、約30名が参加した。農家と交流し、農業について知る機会になっただけでなく、科学の視点で梨について学ぶこともできた。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：－ 子ども向けの収穫体験事業の検討として、貴重なトライアルの場になった取組である。その後、この形での事業は展開していないが、農業体験にSDG'sを絡めて展開できた最初の例である。実際の運営には約100万円かかっており、そのほとんどを民間の助成金で補っていた。民間事業としては自走するのは難しい取組である。
農業体験 3-3	【取組】 手賀沼スクールヤード	【実施年度】 令和3年度～	【活用予算】 令和3年：観光庁補助事業活用（協議会で採択）／9,000,000円 令和4年：観光庁補助事業活用（協議会で採択）／7,000,000円
【内容】 「奥手賀ツーリズム」が運営する、近隣の小中学校向けの自然体験学習プログラム。農業・水辺・環境・歴史の4つのテーマでプログラムを構成し（1テーマ20～30人）、受け入れは地元の実業者や市民団体が行っている。千葉県立手賀の丘青少年自然の家に宿泊する学校が、林間学校の中のプログラムとして実施する場合が多い。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：○ 令和3・4年度でコンテンツ開発を行い、その後民間事業者により自走できている取り組みである。こうした事業の立ち上げ支援が、今後、道の駅しょうなんや柏市に求められる。農家にとっては、子どもたちによる農業への理解・食育につながるだけでなく、大人数で農作業をすることで、単純な作業の労働力としてもメリットがある。市民団体にとっても、日々の活動を周知する機会になっており、こうした地域の事業者・団体と連携して進めることが非常に重要である。

農業体験 3-4	【取組】 しょうなん農家サポーターキッズ	【実施年度】 令和4年度・令和5年度	【活用予算】 令和4年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／2,000,000円 令和5年：観光庁補助事業活用（協議会で採択）／5,000,000円
【内容】 手賀沼スクールヤードから派生した、スクール形式での農業体験プログラム。地域の小中学生が春休みに3日間通いながら、受け入れ農家の下で農作業体験を行う。通年で開催（月1回程度の活動）、農泊プログラム（1泊2日）もトライアルを行った。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：－ 手賀沼スクールヤードが3時間程度のプログラムであるのに対し、しょうなん農家サポーターキッズは3日間実施するため、農家と深く交流することができ、食育の推進や地域への愛着の醸成には効果大きい。参加した子どもたちが、受け入れ農家の販売ポップを作り直売所に掲示する等、「サポーター」としての可能性も十分に見えたプログラムである。一方で、実施に向けては費用面・運営面でコストがかかるため、出荷者会と密に連携する等工夫が必要である。
農業体験 3-5	【取組】 はじめてのはたけ	【実施年度】 令和5年度～	【活用予算】 令和5年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／2,000,000円 令和6年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／2,000,000円
【内容】 未就学児向けの農業体験プログラム。道の駅しょうなんへのファミリー層の来訪が増えたことから、未就学児をターゲットに収穫体験と調理体験を組み合わせるプログラムを開発し、知産知消の推進を目指している。合わせて保育園向けのプログラムも造成した。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：－ 2年間のトライアルを経て、受け入れ農家の発掘、プログラム内容の検証（難易度、時間等）、必要備品の調達等、運営体制の構築をすることができた。令和7年度からは、道の駅しょうなんの食育推進事業として展開していく（年4～5回の開催を予定）。調理体験を芝生ひろばで行うことで、食育にしっかり取り組んでいることのPRにもつながる。また、関心を持っている市内事業者もあり、協賛や共催といった形での開催に向け、検討・検証を進めている。
農業体験 3-6	【取組】 NEAL リーダー要請講座	【実施年度】 平成29～31年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／年2,500,000円
【内容】 自然体験プログラムを展開していく中で、実際に現場で動ける人材の確保が重要だと考え、人材育成の講座を3年間開催した。3泊4日の集中講座で、プログラム造成・運営のノウハウ、救命救急の基礎を学ぶ。講座受講生は、令和2年度以降、収穫体験事業のサポートスタッフ等を務めている。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：－ 3年間で52名の受講生が講座を受け、「NEALリーダー（自然体験活動指導者）」と「L.S.F.A. 救急蘇生法」という資格を取得できた。受講生の中には、自身で事業を展開するメンバーがあり、その後の手賀沼エリアでの活動につながった。また、農業土・収穫体験事業のスタッフとして参加するようになったメンバーもいる。一方で、受講後のサポート体制構築が難しく、手賀沼に関わっていない受講生も多くいることが課題である。

農業体験 3-7	【取り組み】 援農ボランティア	【実施年度】 令和6年度～	【活用予算】 道の駅しょうなん独自予算（職員によるトライアル実施のため特別な予算はなし）
【内容】 令和6年度から、援農ボランティアの仕組みの検討を進めている。「イトローカル探検隊（東京都国立市）」を訪問する等、事例調査をしながら、手賀沼エリアで効果のある方法を検討している。初年度は、道の駅しょうなんスタッフ1名が、年間を通して農家の要請に応じて農作業のサポートに向かうトライアルを実施した。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：－ 令和6年度は、新規就農に関心のあるスタッフが、様々な農家の農作業サポートを行った。まとまった労力が必要な単純作業においては、農家にとっても十分にメリットがあるとわかった。ある程度農作業のノウハウを持った人材が中心となり、援農ボランティアをまとめて運営していく体制が望ましい。令和7年度は、道の駅しょうなんが独自に予算をつけ、モニターを集める等をしてしながら、仕組みづくりに取り組んでいく。
農業体験 3-8	【取り組み】 手賀沼ひまわりクラブ	【実施年度】 平成30年度～	【活用予算】 平成30年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／2,000,000円 平成31年～：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／年500,000円
【内容】 地元農家からの提案により、耕作放棄地の活用・再生の取組として、市民参加型のひまわり栽培プロジェクトを実施した。5月に種まきをし、6～7月と圃場管理、8月に種を収穫し、冬季に油を絞った。完成したひまわり油は、イベント販売やふるさと納税返礼品として活用した。冬は菜の花を栽培し、収穫体験圃場として使用。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：○ 地元農家との議論の中で、使われなくなった農地の地力維持の方法としてひまわり栽培が良いのではないかと考え、実験的にスタートした。小さな面積であれば、市民参加型で十分管理ができるが、面積を広げていくと考えた場合、農家の積極的な協力や機械化が必須となってくる。まだそこまで注力する施策とはなっておらず、今後の展開は検討が必要である。2年目以降、福祉施設が参加し、農福連携の可能性を探ったが、自走する取り組みにまでは至っていない。
農業体験 3-9	【取り組み】 農泊プログラム	【実施年度】 平成31年5月・7月	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／1,000,000円
【内容】 千葉県からの紹介で、日本で修学旅行中の台湾の中高生の農泊受け入れを行った。1泊2日のプログラムで、5月は10家庭32名、7月は6家庭17名を受け入れた。地元農家がホストファミリーとなり、各家庭2～4名が1泊し、夕食の提供、日本の文化の紹介等を行った。			【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：－ 環境保全：－ インバウンド需要が高まり、国や県も力を入れているテーマであるが、手賀沼エリアではまだ受け入れ体制が整っていないのが現状である。受け入れ農家の確保と同時に、専門的に対応できるスタッフの育成がカギとなってくる。実施した農家としては、年2～3回の受け入れであれば対応できるとのことだが、専門的なスタッフを用意して対応するとなると、かなりの頻度で受け入れていく必要がある。今後も取り組むのであれば、関心のある事業者や組織を見つけていくことが重要である。

④地域回遊型イベント（交通手段の実験）

手賀沼の来訪者が地域を回遊することで、滞在時間の延長・購買消費額の増加・満足度の向上が期待できる。周辺の事業者にも大きなメリットがあることから、地域全体の活性化の視点で、行政がある程度予算を確保していく姿が望まれる。一方で、道の駅しょうなんが拠点となり、地域に来訪者を誘導する・回遊させることが重要であり、道の駅しょうなんが果たし得る役割は大きいと言える。



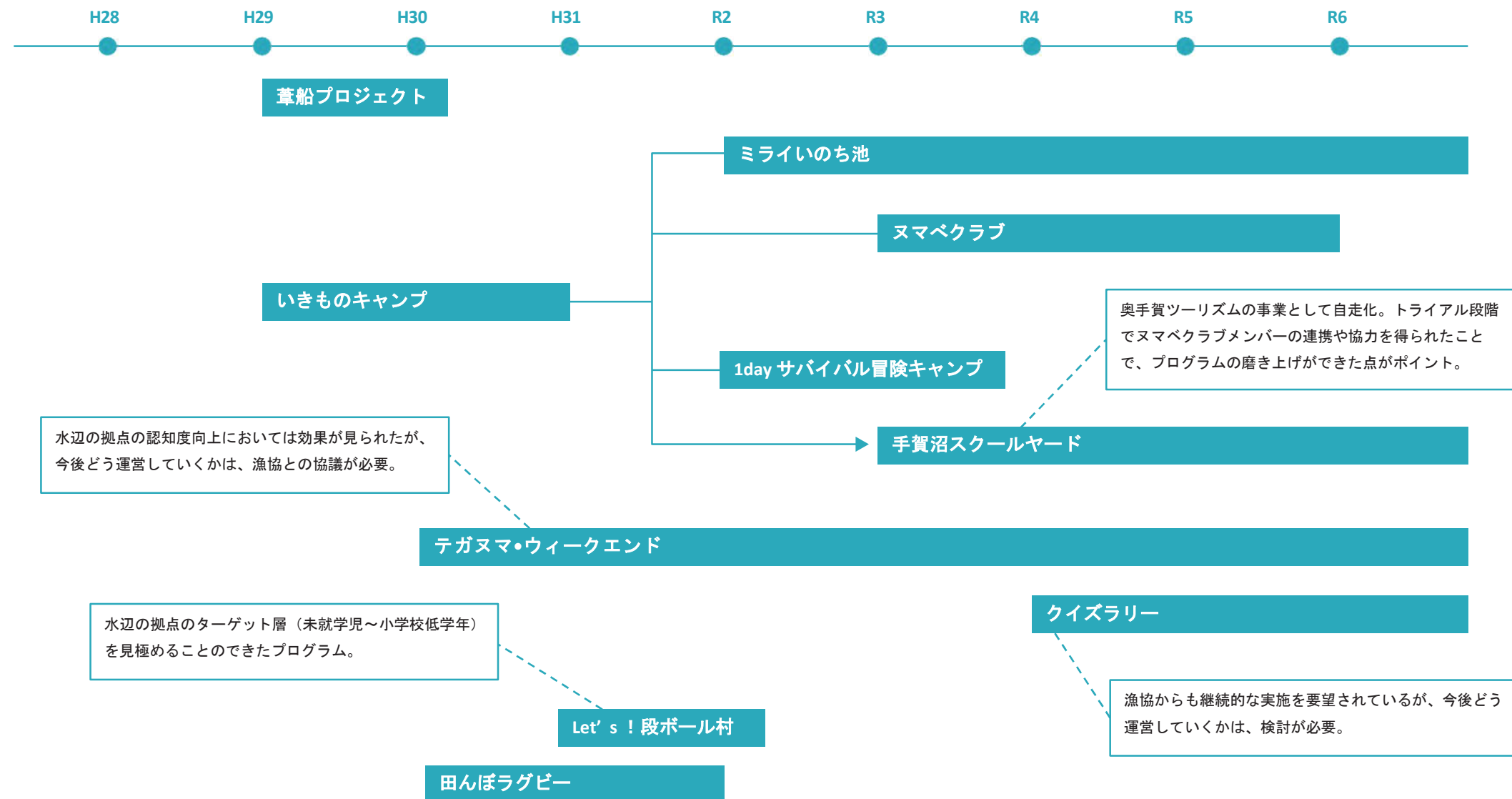
地域回遊 4-1	【取り組み】 手賀沼いちごスタンプラリー	【実施年度】 令和2年度～	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／年 500,000～1,000,000 円
【内容】 手賀沼エリアの農産物を PR し、地域の回遊性を向上させるイベント。周辺のいちご農園と、いちごメニューを提供する飲食店を巡るスタンプラリー形式で開催。毎年 2 月～3 月に開催し、スタンプを集めると、参加店で使えるクーポンや地元野菜のセットがあたる。期間中、道の駅しょうなんにて、スタンプ対象のイベントも実施。		【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：○ 環境保全：－ 毎年開催することで、固定のファンが根付いてきている。4 年目からは、参加店舗から参加費を取る形で運営し、自走化に向けた検討を進めている。一方で、リピーターの創出、周辺農家・店舗の売上向上につながっている取り組みであり、地域全体の活性化に寄与することから、道の駅しょうなんだけでなく、公的な予算の活用も検討すべきテーマである。農家と飲食店のネットワーク作りにもつながっており、地域一体で地産地消を進めるための土台作りになっている。	
地域回遊 4-2	【取り組み】 手賀沼ブルーベリーサマー	【実施年度】 令和3年度～	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／年 500,000～1,000,000 円
【内容】 手賀沼エリアの農産物を PR し、地域の回遊性を向上させるイベント。周辺のブルーベリー摘み取り園と、ブルーベリーのメニューを提供する飲食店を巡るスタンプラリー形式で開催。毎年 6 月～8 月に開催し、スタンプを集めると、参加店で使えるクーポンや地元野菜のセットがあたる。期間中、道の駅しょうなんにて、スタンプ対象のイベントも実施。		【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：○ 環境保全：－ 毎年開催することで、固定のファンが根付いてきている。いちごに比べて参加者は劣るが、ブルーベリーは摘み取り園が多く、地域の農業の PR としては非常に意味のある取り組みである。リピーターの創出、周辺農家・店舗の売上向上につながっている取り組みであり、地域全体の活性化に寄与することから、道の駅しょうなんだけでなく、公的な予算の活用も検討すべきテーマである。農家と飲食店のネットワーク作りにもつながっており、地域一体で地産地消を進めるための土台作りになっている。	
地域回遊 4-3	【取り組み】 フルベジツアー	【実施年度】 平成29年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／400,000 円
【内容】 道の駅しょうなん発着のバスツアーを開催。農業体験や歴史体験を組み込んだコンテンツを造成。カブやネギ、イチゴ等の農産物をテーマにしたツアーや、遊覧船を組み合わせたツアー等、地域の資源を活かしたコンテンツ作りを目指した。		【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：△ 環境保全：△ 地域の観光農園や寺社に人を誘客できたことは評価できる。普段なかなか行く機会のない施設、行きにくい施設をバスで結ぶことで、手賀沼の新たな魅力を、多くの方に知ってもらうことができた取り組みである。地域の魅力をパッケージ化して見せ、効率よく巡るバスツアーは、ニーズも高く、手賀沼エリアでも展開していきたいコンテンツである。一方で、旅行者との連携、収益性の確保等、クリアすべき課題は大きい。	

地域回遊 4-4	【取り組み】 柏市農の魅力発見ツアー ～Go To 農～	【実施年度】 令和4年度	【活用予算】 柏市事業（柏商工会議所）／26,000,000円 手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会にはツアー支援業務を委託／2,500,000円
【内容】 コロナ禍での観光消費増加を目指した、柏市内を巡る団体向け貸切バスツアーを柏市が実施。協議会は、手賀沼エリアの担当として、体験受け入れ農家や地産地消メニューを提供する飲食店の開拓、道の駅しょうなんでの体験プログラムの提供等、ツアー支援業務を行った。ひまわり油のハンドクリーム作りや、菜の花収穫体験等を実施。			【効果】農業振興：○ 回遊性向上：○ 環境保全：－ 普段なかなか手賀沼エリアに来られない市民に対して、手賀沼を訪れる機会の提供、魅力の発信をすることができた。このツアーを機に、体験の受け入れを行う農家が増えたことは、大きな収穫である。一方で、バスツアーだからこそ訪れることができた場所は多く、ツアー終了後、再度訪れる際には、自家用車のない市民には交通アクセスが限られているとの声も聞かれた。手賀沼エリアへのアクセスの改善の必要性が見えた企画である。
地域回遊 4-5	【取り組み】 サイクリングツアー	【実施年度】 令和5年度～	【活用予算】 令和5年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／200,000円 令和6年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／100,000円
【内容】 「手賀沼・歴史サイクリングマップ」を活用したツアーを開催。マップのルートガイドと一緒に巡り、地域の歴史や文化にふれる体験を提供。道の駅しょうなんに集合し、レンタサイクルで巡るため、気軽に参加できるコンテンツになっている。令和5年度にトライアルを実施し、令和6年5月にツアーを開催した。			【効果】農業振興：－ 回遊性向上：○ 環境保全：△ 道の駅しょうなんのレンタサイクル利用客を増やすための取組の1つ。ガイドと巡るため、5～10人程度が最適であり、収入が多く見込めるわけではないが、道の駅しょうなんとして定期的に取り組み発信することで、レンタサイクルの魅力のPRにはつながる。ガイドの丁寧な解説によって、地域の歴史をしっかりと学ぶことができ、マップの配布だけでは伝わらない、地域の魅力を発信することができる。
地域回遊 4-6	【取り組み】 シャトルバス	【実施年度】 平成28年度～令和3年度	【活用予算】 柏市事業（道の駅しょうなんへ委託）／年3,500,000円
【内容】 柏駅西口と道の駅しょうなんを結ぶ無料シャトルバスを運行。土日祝のみ、1日4～5便で、定員は27名。柏駅からおおよそ30分で道の駅しょうなんに行ける交通手段として活用された。			【効果】農業振興：△ 回遊性向上：△ 環境保全：－ 年間で約5,000人が乗車した。主に高齢の方が利用しており、中には道の駅しょうなんに隣接する温浴施設の利用のために乗車している方も見られた。乗車した1名あたり2,000円程度の買い物があれば、1,000万円の売上に繋がる。道の駅しょうなんが独自で運行していく可能性を考えると、この売上に対して年間のバス委託費350万円をどう捉えるのか、検討が必要である。

農業体験 4-7	【取り組み】 遊覧船	【実施年度】 平成 28 年度～平成 31 年度	【活用予算】 柏市事業（道の駅しょうなんへ委託）／年 4,000,000 円
【内容】 道の駅しょうなんを出発し、手賀沼を1週巡る「手賀沼納涼船」（夏期）や、道の駅しょうなんと手賀沼フィッシングセンターを往復する「遊覧船」（春期）、遊覧船を組み込んだツアー等、様々なアプローチで取り組んだ。 			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：－ 夏の納涼船は手賀沼のハスを見られることもあり、非常に人気のコンテンツであった（7月～9月で乗船者は約400人）。また、春は収穫体験ツアーやランチ企画と連動させることで、集客を図ることができた。手賀沼の観光コンテンツとしてニーズがあることは把握できたが、ボート事業者の高齢化やコロナ禍での事業縮小等、継続して取り組める環境を構築できていないのが現状である。

⑤水辺の拠点プログラム

手賀沼の第2の拠点・水辺の拠点として整備してきた「手賀沼フィッシングセンター」では、その環境を活かした体験プログラムの開発にチャレンジしてきた。ヌマベクラブが発足し、各団体の視点を活かして、体験プログラムの磨き上げができたことで、「手賀沼スクールヤード」として持続的に展開されている。水辺の拠点活性化を目指したイベントに関しては、施設管理者である手賀沼漁業協同組合の意向も踏まえて検討していく必要がある。



水辺の拠点 5-1	【取り組み】 葦船プロジェクト	【実施年度】 平成 29 年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／300,000 円
【内容】 手賀沼の葦を狩り、それを材料に船を作るワークショップ。プログラムを通して、葦原の役割や、手賀沼の水質改善の歴史等を学ぶことも狙いとしている。開催にあたっては、市内の学習塾と連携することで、小中学生に PR できるように企画した。			【効果】 農業振興：－ 回遊性向上：－ 環境保全：○ 水辺の拠点の環境を活かした自然体験プログラムとして開発できた。2 年間のトライアルの後、しばらく実施する体制が整わず、開催を中断していたが、ミライいのち池での活動がスタートしたことで、参加者も関心を持つようになり、令和 5 年度から、ミライいのち池の活動の中で実施できている。一度トライアルを行っておくことで、実施する環境が整ったり、モチベーションのある主体が現れた際に、スムーズに取り組めることが可能となる。
水辺の拠点 5-2	【取り組み】 ミライいのち池	【実施年度】 令和 2 年度～	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／年 600,000 円
【内容】 平成 30 年度に整備した観察池を活用し、令和 2 年度から生きもの観察会を毎月開催。「ミライいのち池の生きものとお話ししよう！」というタイトルで、観察するだけでなく、生きもののすみか作りを試行錯誤しながら実践。魚道や水路、浅瀬等を、子どもたちのアイデアを基に作成。楽しく学びながらビオトープ作りを進めている。			【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：－ 環境保全：○ 手賀沼周辺の環境を知ってもらうだけでなく、生きもの観察会を通して、積極的に環境保全に関わろうとする子どもたちが増えたことが、大きな収穫である。観察会の講師も地元の市民団体が務めており、この取り組みが「手賀沼スクールヤード」の 1 プログラムにも発展している。また、令和 5 年度からは、実際の手賀沼の水辺空間でも、生きものすみかについて考えようと、新たな市民団体を立ち上げ、千葉県河川アダプトプログラムや民間助成を活用しながら、取り組みが拡大している（ヌマベの楽校）。
水辺の拠点 5-3	【取り組み】 ヌマベクラブ	【実施年度】 令和 3 年度～5 年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／年 500,000 円
【内容】 再整備された手賀沼フィッシングセンターを活用したい団体が徐々に増えてきた中で、相互の連携や情報共有を促すために、団体同士の集まり「ヌマベクラブ」をスタートさせた。毎月 1 回勉強会を開催し、手賀沼の歴史や現状を学んだり、ゲスト講師を呼び先進事例を紹介してもらったり、様々なテーマで議論を行った。勉強会は令和 5 年度で終了している。			【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：－ 環境保全：○ 水辺の拠点をフィールドにする様々な市民団体のネットワークが構築された。団体同士が合同でイベントを実施したり（クリーンアップ大作戦）、新たなプログラムを開発したり（手賀沼スクールヤード）と、ヌマベクラブがあったからこそ発展した取り組みがいくつもある。水辺の拠点の活性化につながっただけでなく、周辺での環境保全活動や、環境教育活動にも寄与している。

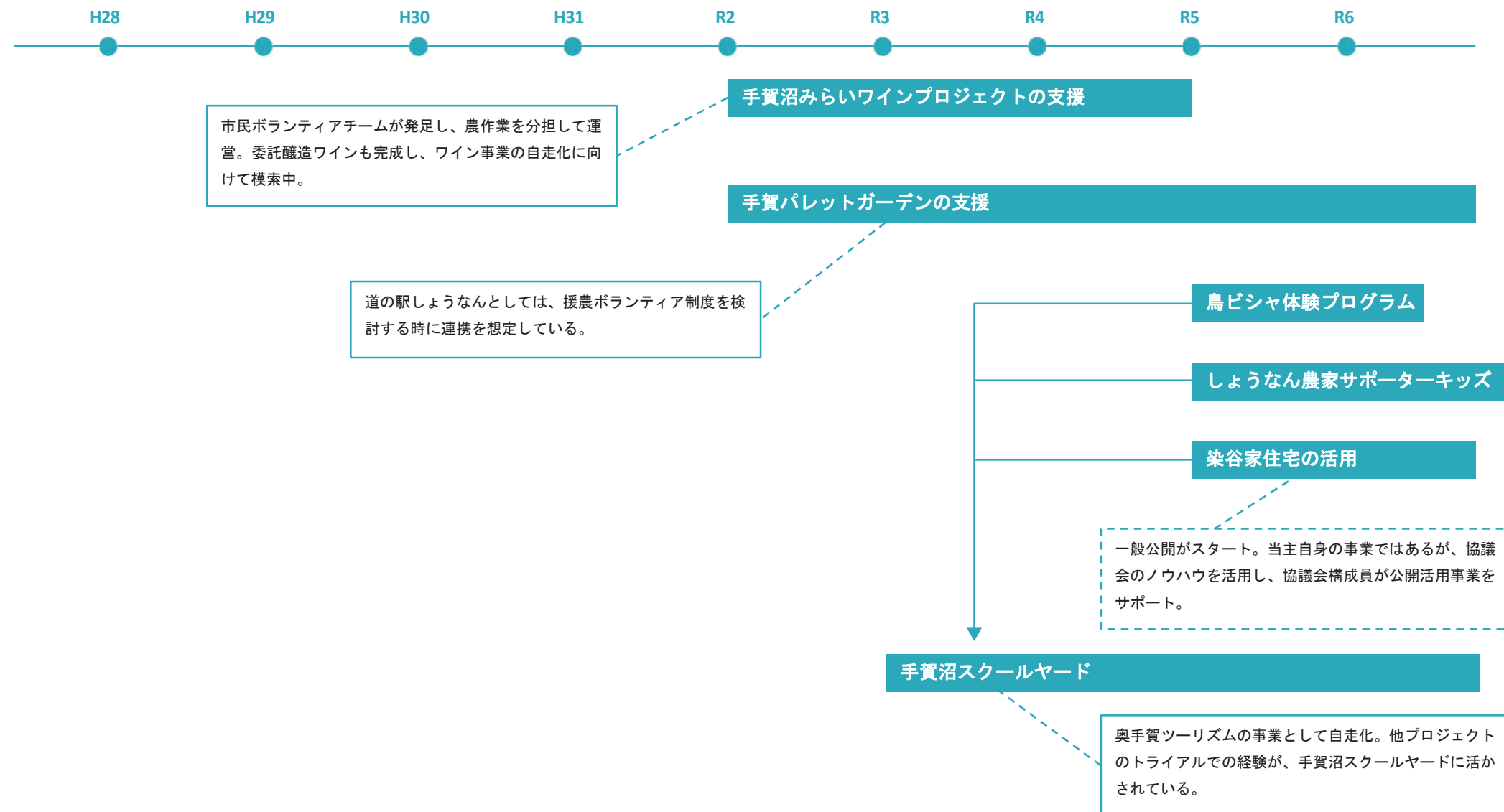
水辺の拠点 5-4	【取り組み】 いきものキャンプ	【実施年度】 平成 29 年度・30 年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／年 500,000～1,000,000 円
【内容】 水辺の拠点での自然体験プログラムの実験として、夜の生きもの観察や、星空観察会、野鳥の探鳥会等、様々なテーマで開催した。キャンプ場での宿泊付きプログラムも実施している。		【効果】 農業振興：－ 回遊性向上：－ 環境保全：○ 生きもの観察や、星空観察、探鳥会と、運営形態は当時と異なるが、現在持続して取り組んでいる企画につながっている。トライアルイベントとして、専門家を講師に呼んで実施したが、今では市民団体が講師となり、開催できている。水辺の拠点として展開可能なテーマにしっかりとアプローチし、実験的な取り組みを繰り返すことで、少しずつ形になってきている。	
水辺の拠点 5-5	【取り組み】 1day サバイバル冒険キャンプ	【実施年度】 令和 2 年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／300,000 円
【内容】 「防災」をテーマにした、体験プログラムを開催。水辺の拠点とその周辺を歩きながら、災害時を想定したサバイバル実演講習（応急救護、塹壕掘り、防災食調理、ペースカウント）を行った。トライアルとして、青少年育成を支援する事業団と連携して実施した。		【効果】 農業振興：－ 回遊性向上：－ 環境保全：△ トライアルの結果、企業研修や林間学校等の団体向けのプログラムとしての展開が好ましいと判断した。「防災」というテーマで取り組まれることにはならなかったが、水辺の拠点の環境を活かして、小中学校向けの自然体験プログラムを造成するきっかけになった企画である。	
水辺の拠点 5-6	【取り組み】 テガヌマ・ウィークエンド（納涼まつり）	【実施年度】 平成 30 年度～	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会） ／年 500,000 円～1,000,000 円
【内容】 水辺の拠点をPRするイベントとして、毎年10月に開催している。水辺の拠点の新たな使い方を提示するべく、新しく整備された空間や、普段あまり入ることのない桟橋周辺等を活用し、気軽に自然環境を楽しめるプログラムを展開した。また、夏には納涼まつり（令和元年～）も開催した。		【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：△ 環境保全：○ 水辺の拠点を広く知ってもらう機会となった。また、参加する市民団体が、普段の活動や取り組みをPRする場ともなっていた。毎年、これまで使われていなかった空間（橋詰空間や桟橋周辺等）を実験的に使うことで、水辺の拠点のさらなる活用可能性を検討することもできた。このイベントを機に、水辺の拠点に関わるようになった市民や団体も多い。今後の展開としては、各プログラムをいかに持続的なものにしていくかが重要である。	

水辺の拠点 5-7	【取り組み】 クイズラリー	【実施年度】 令和4年度～	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）+手賀沼流域フォーラム助成金 ／年 200,000 円
【内容】 水辺の拠点及び周辺で実施するクイズラリー。毎年テーマを決めて、4～5箇所にクイズを掲示。全て巡ると釣り堀にて景品がもらえる。これまでは、「歴史」「生きもののすみか」「水辺の植物」をテーマに実施し、子どもたちに手賀沼の自然環境に興味を持ってもらうことを目指している。			【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：△ 環境保全：○ 釣り堀で台紙の配布と景品交換を行うのみで、人手を必要としないプログラムとして開発した。水辺の拠点の滞在時間延長につながったと同時に、釣り堀客の待ち時間（魚を焼く時間）に提供できるプログラムとして運営できた。それまで、なかなか手賀沼漁協と事業面で連携できていなかったが、この取り組みでは、双方メリットがあり、継続して実施できている。
水辺の拠点 5-8	【取り組み】 Let's! 段ボール村	【実施年度】 平成31年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／200,000 円
【内容】 水辺の拠点内のキャンプ場にて、冬の間の集客イベントとして実施した。段ボールを使って自由に工作ができ、子どもだけでなく、大人も夢中に遊べる企画であった。			【効果】 農業振興：－ 回遊性向上：△ 環境保全：－ 低予算かつ少ないスタッフで運営できるコンテンツを開発できた。この企画を通して、子育て世代の「冬の外遊び」というニーズを把握することができ、その後の企画の打ち出し方の大きな指針となった。また、水辺の拠点のメインターゲットを、「未就学児から低学年の子育て世代」と定めることになったのも、こうした企画に実験的に取り組んだ結果である。
水辺の拠点 5-9	【取り組み】 田んぼラグビー	【実施年度】 平成30年度・平成31年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／500,000 円 ＋ 参加費・協賛金：200,000 円
【内容】 水辺の拠点に隣接する田んぼで実施したスポーツイベント。一般のチームが参加できる大会として開催。NECグリーンロケッツ東葛とクボタスピアーズ船橋・東京ベイにも協力していただき、所属選手が参加してくれ、交流を図ることができた。参加者に少しでも農地・農業に興味を持ってもらうことを狙いとした。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：○ 農業に関心をもってもらうためには、農産物や食のアピールだけでなく、全く違った視点で人を呼び込むことも重要である。普段、農に関心のない市民に対して、新たな角度から魅力を提示し、手賀沼に足を運んでもらうことが大事である。開催には大きな労力がかかること、スポーツの競技性を重視するのか、誰でも参加できるエンタメ性を重視するのかという議論があったことで、3回目以降の開催はできていない。

水辺の拠点 5-10	【取り組み】 手賀沼スクールヤード	【実施年度】 令和3年度～	【活用予算】 令和3年：観光庁補助事業活用（協議会で採択）／9,000,000円 令和4年：観光庁補助事業活用（協議会で採択）／7,000,000円
【内容】 「奥手賀ツーリズム」が運営する、近隣の小中学校向けの自然体験学習プログラム。水辺の拠点では、釣り体験、生きもの観察会、ゴミアート（拾ったゴミで作品作り）、野鳥観察会、稲刈り体験（周辺の圃場で開催）等、いくつものプログラムが実施されている。大型バスの発着、トイレ休憩、昼ごはん等の場所としても、水辺の拠点が活用されている。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：○ 「ヌマベクラブ」での団体間の交流が、「手賀沼スクールヤード」の造成において、大きな要因となった。それぞれの団体がやりたいこと・目指したいことを共有できたことで、プログラム開発がスムーズに行えた。また、再整備直後から、様々な取り組みにチャレンジしてきたことで、空間的な活用アイデアも蓄積され、手賀沼スクールヤードの1つの基地として、水辺の拠点が機能している。

⑥ 鷺野谷活性化プログラム

鷺野谷地域では、農に関するプロジェクトが地域住民・市民団体から複数立ち上がり、協議会が活動をサポートをしてきた。このような取組は自走段階に入るまで、多くの時間要するが、トライアルの中から生まれたプログラムが「手賀沼スクールヤード」に展開されるなどの波及効果が見られた。各プロジェクトが進行する中で、道の駅しようなんの取り組みやアイデアと重なる部分が出てくる可能性があり、しっかりと活かしていくことが重要である。



鷺野谷 6-1	【取り組み】 手賀沼みらいワインプロジェクトの支援	【実施年度】 令和2年度～令和5年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／年 100,000～500,000 円
【内容】 地元の農家が中心となって立ち上がった、手賀沼産ワイン作りのプロジェクト。鷺野谷の遊休農地を活用して栽培をスタートし、令和3年度から委託醸造でのワインが完成した。徐々に面積を増やして活動を展開。ワイン作りに関心のある市民が集まってボランティアチームが作られ、日常的な農作業のサポートを行っている。			【効果】 農業振興：○ 回遊性向上：△ 環境保全：○ 協議会としては、プロジェクト立ち上げ時のサポートを行った。専門家を呼んでのブドウ作りの勉強会を開催しながら、手賀沼の土地に合ったブドウの栽培を検討した。また、地域の方々と先進事例の視察に行き、鷺野谷地域でのワイン・ツーリズムの可能性も議論・検討した。令和6年度からは、独自の事業として展開しているが、ブドウ・ワインに限らず、新規農産物の栽培に関しては、地域の合意形成や事業のリスク等も鑑み、協議会や柏市、道の駅しょうなん等による中間支援があることが望ましい。
鷺野谷 6-2	【取り組み】 手賀パレットガーデンの支援	【実施年度】 令和2年度～	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／年 200,000 円
【内容】 「遊休農地の再生」をテーマにしたパレット柏の市民講座のサポートを行った。片山地区の圃場での活動では、指導者となる地元農家を紹介したり、鷺野谷地区では、研修活動を支援したりした。講座終了後は、市民団体「手賀パレットガーデン」として活動を継続しており、遊休農地活用のモデル事業として、取り組みをサポートしている。			【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：－ 環境保全：○ 新たな担い手の可能性を検証する大事な取り組みである。実際に、この活動の中には、農菜土・収穫体験のボランティアスタッフをしたり、地元農家での援農活動をしたりと、農業に関わり始めているメンバーもいる。また、1名、新規就農を目指して動いているメンバーもいる。最初は小さな市民活動であるが、それが継続され、地元とより関わりを持っていく中で、農の新たな担い手が少しずつ現れてくる。その可能性を理解し、こうした活動に何らかの支援をしていく意義は大きい。
鷺野谷 6-3	【取り組み】 鳥ビシャ体験プログラム	【実施年度】 令和5年度	【活用予算】 柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／200,000 円
【内容】 鷺野谷地域の伝統行事「鳥ビシャ」を体験できるプログラムを造成した。コロナ前は道の駅しょうなんで定期的に実施していたが、コロナ禍で一時中断。手賀沼スクールヤードや、しょうなん農家サポーターキッズの取り組みに合わせて、再度、鷺野谷地域の歴史体験ができないかと、プログラム開発を試みた。			【効果】 農業振興：△ 回遊性向上：－ 環境保全：△ 地域の鳥ビシャ保存会も高齢化が進む中、次世代に歴史・文化を継承していくためには、体験プログラム化し、多くの人が気軽に体験できるようにしていくことが重要である。今回は、手賀沼スクールヤード等の受け入れを機に、地元婦人会が中心となり、鳥ビシャ作り体験を再開することができた。こうした機会を提供していくことが重要であるし、鳥ビシャに限らず、地域の伝統や文化において、積極的に体験プログラム化を進めていくべきである。

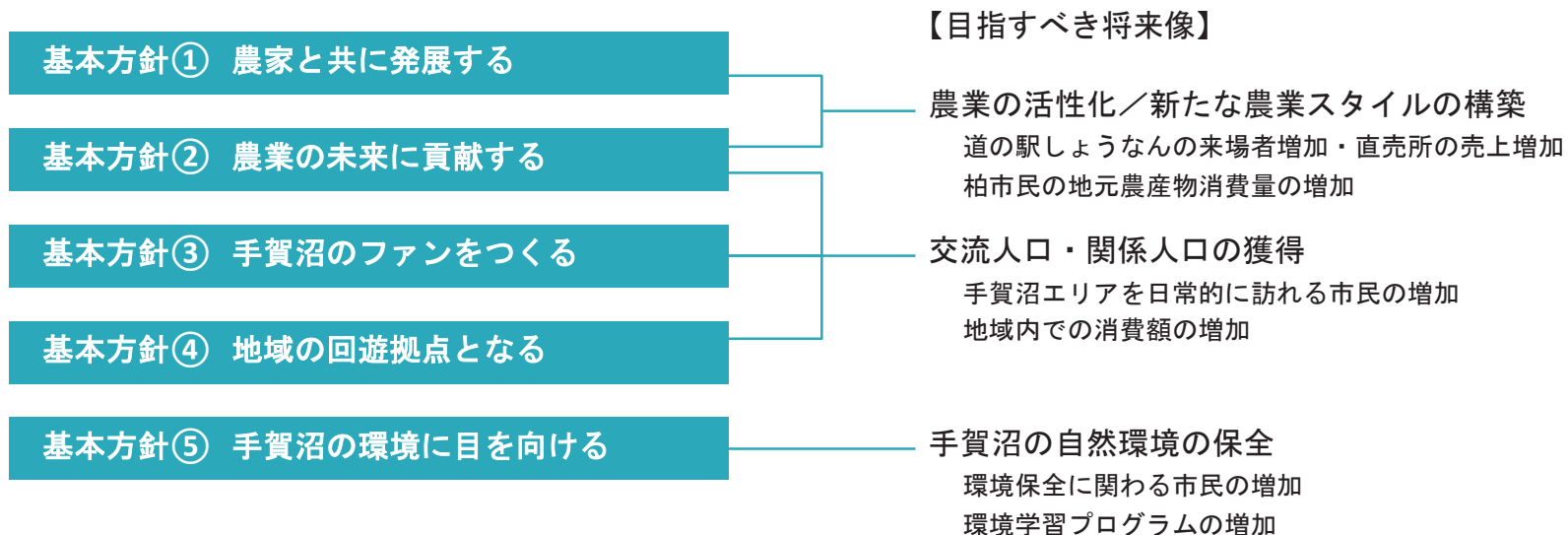
鷺野谷 6-4	【取り組み】 しょうなん農家サポーターキッズ（農泊）	【実施年度】 令和5年度	【活用予算】 観光庁補助事業活用（協議会で採択）／5,000,000円
【内容】 令和6年3月に、1泊2日の「農ある暮らし体験」プログラムとしてトライアルを行った。鷺野谷地区で、農業体験（カブやネギの収穫）、歴史体験（染谷家住宅の清掃、鳥ビシャ作り）、調理体験（かまどでの炊飯、味噌汁作り）を組み合わせで開催。			【効果】農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：○ このトライアルでは、千葉県立青少年自然の家での宿泊であったが、今後は、地元農家や古民家に泊まる等、魅力的な宿泊環境を整えていく必要がある。コンテンツとしては、地元農家の協力を得られることができ、鷺野谷という地区内で、様々なプログラムを組み合わせコンパクトに実施できる点は魅力的である。染谷家住宅の活用も含めて、インバウンド向けにも十分アレンジが可能なコンテンツであり、今後のさらなる検討が望まれる。
鷺野谷 6-5	【取り組み】 染谷家住宅の活用	【実施年度】 令和5年度～	【活用予算】 令和5年：柏市事業（手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会）／300,000円
【内容】 令和6年10月に一般公開をスタートさせた国登録有形文化財・染谷家住宅の活用方法を、文化課と連携しながら検討した。令和5年度は、かまどご飯体験や、お屋敷探検、土塗り体験等を実施した。また、一般公開に向けた準備においても、地図の作成、道の駅しょうなんでの紹介等、連携を図った。			【効果】農業振興：△ 回遊性向上：○ 環境保全：△ 道の駅しょうなんからほど近い立地の染谷家住宅は、地域での回遊性向上を考える上では重要な拠点の1つである。道の駅しょうなんから鷺野谷地域への人の流れを作り、地域の歴史や文化、農業にふれてもらう機会を提供していくことが可能となった。民間の旅行会社も染谷家住宅を組み込んだツアーを実施する等、関心も高まっており、今後も道の駅しょうなんと染谷家住宅が連携し、地域での回遊性向上、滞在時間延長に取り組んでいくことが重要である。
鷺野谷 6-6	【取り組み】 手賀沼スクールヤード	【実施年度】 令和3年度～	【活用予算】 令和3年：観光庁補助事業活用（協議会で採択）／9,000,000円 令和4年：観光庁補助事業活用（協議会で採択）／7,000,000円
【内容】 「奥手賀ツーリズム」が運営する、近隣の小中学校向けの自然体験学習プログラム。鷺野谷地域でも、トライアルを重ねたことで、歴史散策や鳥ビシャ作り体験、改修中の染谷家住宅を活用した建築作業の体験等、様々なプログラムを子どもたちに提供することができた。			【効果】農業振興：○ 回遊性向上：－ 環境保全：○ しょうなん農家サポーターキッズのトライアル、染谷家住宅活用に向けた検討等をきっかけに、鷺野谷地区でもプログラムを提供することができている。柏市の鷺野谷農業交流拠点も休憩スペースとして活用できるため、率先して受け入れが可能な地域であるが、実践を重ねる中で、地域住民からの理解と協力を得ていくことが重要である。まずはアグリツーリズムのモデル地区として、鷺野谷地区でモデルを構築していく姿を目指したい。

4 基本方針

手賀沼の現況、農業を取り巻く環境、柏市としての方向性、これまでの取り組みによって見えてきたもの、これらを踏まえて、これからの道の駅しょうなんに求められる役割や機能を5つに整理した。

農業においては、農家が道の駅しょうなん直売所に出荷するメリットをしっかりと作り出すことで、より多くの農家に参加してもらい、より多くのチャレンジに共に取り組んでいく姿を目指す。知識やスキルの共有、援農人材の育成、出荷作業の負担軽減等を行いながら、農業を続けられる環境を構築してゆく。また、地産地消の土台作りとして、多くの市民が農業にふれられる機会を創出していくことも重要である。

観光・環境の視点では、道の駅しょうなんが情報発信拠点として機能し、手賀沼エリアの魅力・周辺の情報・自然環境について、多くの方に知ってもらい興味を持ってもらう機会を提供する姿を求めるとともに、道の駅しょうなんを拠点に人々が地域を回遊する状況をつくっていくことが、地域活性化において重要である。



基本方針① 農家と共に発展する（農業に対する取り組み）

【方針】

●道の駅しようなんの販売体制の強化

農家の高齢化、後継者不足、そしてそれによる耕作面積の減少によって、道の駅しようなんの一番の商品である「地元農産物」の減少が懸念される。しかし、現状を踏まえると、さらに多くの生産者に出荷してもらうこと、現在の出荷者により多くの野菜を販売してもらうことは、十分可能だと考えられる。

そのためには道の駅しようなんに出荷するメリットを十分に打ち出し、道の駅しようなんが売り場として農家に選ばれるような、仕掛け・取り組みを行っていく必要がある。

●出荷者の取り組み支援

農家と共に発展するためにも、農家に刺激やモチベーションを与えられる直売所の姿を求める。農家と消費者との交流促進や、農家が農業体験や援農ボランティア等の新たな取り組みに挑戦し、互いに刺激し合えるような環境を構築していくことが、出荷者を支える道の駅しようなんとしての大きな役割であるとする。

農業が直面している課題に向き合い、出荷者会を活用して地域農業の活性化に取り組んでいく。

【目標】

■長期的な目標

農業振興拠点である道の駅しようなんとして、来場者を増やし、地元農産物をより多く売り上げることが最大のミッションである。

・想定する指標

- ① 道の駅しようなん直売所売上【増加】
- ② 道の駅しようなん来場者数【増加】

■まず目指したい目標

魅力的な売り場として発展していくために、より多くの農家に出荷してもらえる、農家が負担なくチャレンジできる環境の構築を目指す。

・想定する指標

- ③ 出荷者数【増加】
- ④ 地元農産物の出荷量、出荷割合【増加】
- ⑤ 援農件数【増加】
- ⑥ 出荷者支援の取り組み数（勉強会、検査、イベント等）【増加】

施策

1-1 販売促進・ブランド化

1-3 フレキシブルな出荷体制

1-5 農地の改善

1-7 後継者育成

1-9 出荷農家の拡大

1-2 売れ残り商品・廃棄野菜の活用

1-4 勉強会

1-6 援農の推進

1-8 農業機械のシェア

基本方針② 農業の未来に貢献する（農業に対する取り組み）

【方針】

●知産知消のさらなる推進

様々な課題に直面している日本の農業だが、市民の日々の食を支える重要な産業である。手賀沼で農業に励んでいる農家を支えるのは、周辺に住んでいる市民であり、地元農産物を食べて暮らす消費者である。地域の消費者を育てていくためにも、実際に農家に会う機会、土にふれる体験、地元の農業を知る環境が重要となってくる。それらを道の駅しようなんが提供し「知産知消」を推進していくことが大きな役割である。

●農業の新たな担い手の育成

今の出荷者・農家だけでは、これからの農地を守っていくことが難しい状況になりつつある。農家だけで解決するのではなく、共に新たな担い手を育てていくことが必要である。手賀沼周辺には市街地が広がり、農や食に関心のある市民が暮らしている。そのような市民の力を活かし、新たな農業のスタイルを模索していくことが重要である。新規就農者を獲得するため、収穫体験や市民農園等の農地活用、援農者を受け入れ新たな農産物の生産に挑戦する等の積極的な取り組みが必要になっていくと考えている。

【目標】

■長期的目標

柏市民が、地域の農業・食に関心を持ち、当たり前に関わり、地元の農産物を食べる豊かな食文化を構築していく。

・想定する指標

- ① 地元農産物の消費量【増加】

■まず目指したい目標

柏市民が、農業にふれる、農家と交流する機会をつくる。そして、農業に関わる人材を育成していくことを目指す。

・想定する指標

- ② 農業体験プログラム参加者数【増加】
- ③ 食育プログラム参加者数【増加】
- ④ 援農人材数【増加】
- ⑤ 新規就農者数【増加】

施策

2-1 農業体験プログラム

2-2 食育プログラム

2-3 援農の仕組み構築

2-4 営農へのステップの提供

基本方針③ 手賀沼のファンをつくる（地域に対する取り組み）

【方針】

●地域の魅力の情報発信

手賀沼のファンをつくり、また手賀沼に来てもらう、手賀沼に通ってもらうことが、この地域を元気にすると考えている。その中心的な役割を、地域最大の集客施設である道の駅しょうなんが担い、地域の魅力をしっかりと伝えていくことで、この地域にとって大きな効果をもたらしたい。

●地域の魅力を体験プログラムにして伝える

手賀沼周辺地域の魅力を知ってもらう、体験してもらう機会を積極的に創出していくことが重要である。道の駅しょうなんで地域の多様な魅力を体験できるよう、地域の農家・事業者と連携企画していく。

施策

3-1 地域情報の収集

3-2 メディアの運営

3-3 パンフレット・冊子の作成

3-4 てんと棟活用イベントの開催

3-5 水辺空間を活用したイベントの開催

【目標】

■長期的な目標

手賀沼のファンになり、道の駅しょうなんに日常的に通う市民が増える姿を目指す。

・ 想定する指標

① リピーター（道の駅しょうなん来場者数）【増加】

■まず目指したい目標

手賀沼の魅力を知ってもらい、足を運んでももらう仕掛けを増やしていく。

・ 想定する指標

② SNS フォロワー数（関連アカウントの合計）【増加】

③ ガイドブック・パンフレット等配布数【増加】

④ 道の駅しょうなん主催イベント参加者数【増加】

基本方針④ 地域の回遊拠点となる（地域に対する取り組み）

【方針】

●手賀沼エリアを訪れる機会の提供

道の駅しょうなんを訪れた方に地域の魅力を伝え、回遊してもらうことを目指す。何気なくふらっと立ち寄れる施設だからこそ、地域回遊の玄関口、誘客装置となりうる。

●地域での滞在時間の延長

人を地域に流すことで、地域での滞在時間を延長させ、さらなる消費行動を引き出すことができる。地域の事業者にとっては、道の駅しょうなんと連携することで、新たなチャレンジに取り組みやすくなる。

施策

4-1 地域回遊型イベント

4-2 交通アクセスの改善

4-3 他地域との連携

【目標】

■長期的な目標

道の駅しょうなんを拠点に、地域の農園や飲食店、レジャー施設へと、人が流れる環境を目指す。

・想定する指標

① 地域での消費額の増加【増加】

■まず目指したい目標

地域の事業者と連携して、地域を回遊したくなる仕掛けを実践していく。また、地域回遊を促す交通手段を強化していくことも大きな目標である。

・想定する指標

② 地域回遊型イベントの参加者数【増加】

③ レンタサイクル利用者数【増加】

基本方針⑤ 手賀沼の環境に目を向ける（環境に対する取り組み）

【方針】

●消費される環境から、共に守る環境へ

手賀沼エリアの交流人口が増えることで、地域は元気になるが、それによって自然環境が失われては意味がない。手賀沼のファンが増えることで、より環境に目が向き、環境を守る取り組みが活発化する姿が求められる。地域最大の集客施設として、環境への貢献も重要な役割である。

●環境教育への積極的な貢献

手賀沼エリアの玄関口として、環境保全に向けた情報発信、メッセージの発信をしっかりとできるのが、道の駅しょうなんの強みである。環境保全の啓蒙活動への協力、環境教育プログラムのサポート等、道の駅しょうなんだからこその取り組みを増やしていく。

施策

5-1 道の駅しょうなんでの展示・啓蒙

5-2 環境教育プログラム

5-3 水辺の拠点活性化

5-4 カーボンオフセットの推進

【目標】

■長期的な目標

手賀沼で自然とふれあい、食を楽しみながら、環境保全の活動に参加してみるというライフスタイルの構築を将来像として描いていく。

・想定する指標

① 環境保全に関わる市民の数【増加】

■まず目指したい目標

今の手賀沼の環境を知る、理解する機会やきっかけを増やしていく。水辺の拠点とも連携しながら、小学校の教育カリキュラムと連動させることで、より多くの子どもたちに、手賀沼の環境に目を向けてもらうことを目指す。

・想定する指標

② 展示の実施回数【増加】

③ 環境教育プログラム参加者数【増加】

5 基本施策

5つの基本方針に基づいて、その実現のためのアクションとして、基本施策を整理する。特に力を入れて取り組んでいくべき施策を「重点項目」と定め、事業を推進していく。道の駅しょうなんを、農業振興拠点、情報発信拠点として位置付け、道の駅しょうなんが主体となって進めていくことで、事業の円滑な推進を図っていく。こうした基本施策の他にも、柏市が主に取り組むべき事業、柏市・道の駅しょうなんのサポートの下、地域の事業者が実施していく事業もある。それぞれが連携・連動しながら、基本方針を実現するべく、取り組んでいく。

【基本方針】

【基本施策】

① 農家と共に発展する

1-1 販売促進・ブランド化

1-2 売れ残り商品・廃棄野菜の活用

1-3 フレキシブルな出荷体制

1-4 勉強会

1-5 農地の改善

1-6 援農の推進

1-7 後継者育成

1-8 農業機械のシェア

1-9 出荷農家の拡大

② 農業の未来に貢献する

2-1 農業体験プログラム

2-2 食育プログラム

2-3 援農の仕組み構築

2-4 営農へのステップの提供

③ 手賀沼のファンをつくる

3-1 地域情報の収集

3-2 メディアの運営

3-3 パンフレット・冊子の作成

3-4 てんと棟活用イベントの開催

3-5 水辺空間を活用したイベントの開催

④ 地域の回遊拠点となる

4-1 地域回遊型イベント

4-2 交通アクセスの改善

4-3 他地域との連携

⑤ 手賀沼の環境に目を向ける

5-1 道の駅しょうなんでの展示・啓蒙

5-2 環境教育プログラム

5-3 水辺の拠点活性化

5-4 カーボンオフセットの推進

基本方針① 農家と共に発展する（農業に対する取り組み）

施策1-1
販売促進・ブランド化

重点項目

地元農産物や、それを用いた加工品等の魅力をしっかりと打ち出し、発信していくことが重要である。道の駅しょうなん**オリジナルパッケージ**や**販売ブース**の作成、**PRキャンペーンの実施**等、魅力的なブランディングを推進していく。道の駅しょうなんでしか買えないもの、買いに行きたくなるものを生み出していく。

【取り組み例】 **オリジナルパッケージ**
2024年より、道の駅しょうなんのオリジナルFG規格袋を作成した。一部費用を道の駅しょうなん出荷者が負担しており、農家は市販の袋より安価に購入ができる。ほとんどの農家を使用しており、徐々にサイズを増やしながら、取扱農産物を増やしている。

施策1-2
売れ残り商品・廃棄野菜の活用

重点項目

出荷した野菜を引き取りに来る必要のない売り場が理想的である。販売促進により売り切ることが重要だが、それでも生じる売れ残り品を**加工品への活用**や、**福祉施設・医療施設との連携**、**こども食堂への提供**等で、商品に変えていく努力が求められる。また、**廃棄野菜の堆肥化**による有効活用も手段の一つと考えている。

【取り組み例】 **規格外梨の活用**
2023年より、規格外の梨を集め、加工品開発を進めている。これまでに梨シードル・梨ゼリー・梨ビール等が商品化。梨のペーストにして保存することで、新たな商品にも活用できる。2024年からは、規格外の梨を買い取るようにしており、農家の収入にも繋がっている。

施策1-3
フレキシブルな出荷体制

重点項目

多くの出荷者は、道の駅しょうなん直売所だけでなく、市場や他の直売コーナー等にも出荷するなど、各々のスタイルで出荷している。朝の開店前だけでなく、**農家に合わせて農産物を出荷できる**な体制を構築することで、出荷の負担軽減、そして積極的な出荷を促進していく。また、午後の時間帯に売り場に野菜がなくなってしまうことを防ぐためにも、**AIを活用した販売 分析や出荷量調整**等、対策をとっていく必要がある。

【取り組み例】 **売上通知メール**
道の駅しょうなんでは、その日の売上状況を、各農家ごとにメールで配信している。それを見ながら、1日に4〜5回納品に来る農家もあり、うまく活用されている。一方で、細かな対応が困難な出荷者に対して、より効率的に量やタイミングを調整できる仕組みを検討したい。

施策1-4
勉強会

重点項目

大きく気候が変動する中で、これまでの栽培方法が通用せず収量減少を懸念する声が出荷者から聞かれている。**新たな栽培方法や技術を学ぶ、肥料等のコストカットをすることで経営改善を進める**等、これからの**農業経営のヒントとなる勉強会や交流会**を開催していくことが重要である。

【取り組み例】 **勉強会**
道の駅しょうなんでは、毎年3〜4回、勉強会を開催。これまでに、ほうれん草・人参・じゃがいも等の栽培方法や新品種に関する講座を開催している。講師は、千葉県の指導員に依頼。今後、他の農産物でも開催していくことが重要である。

基本方針① 農家と共に発展する（農業に対する取り組み）

施策 1－5 農地の改善	重点 項目
土壌調査や土壌改良、堆肥の提供等、個々の農家では対応が難しいことに対して、道の駅しょうなんがサポートしていく。道の駅しょうなん最大の商品である地元農産物を生み出す農地をしっかりと守っていく。	
【取り組み例】 土壌調査 希望する農家に対して土壌調査を実施した。農家が持ってきたサンプルを、道の駅しょうなん出荷者が費用負担し検査会社に提出。返ってきた結果を、千葉県の指導員に見てもらい、土壌改良に向けたアドバイスをもらえるようにした。	

施策 1－6 援農の推進	重点 項目
農業に関心のある市民、関わってみたい市民が増えている。そうした市民を「援農」という労働力として活かしていく取り組みを推進する。援農ボランティア制度等の創設を検討していくが、参加者と農家が個別に連絡を取り合うことは難しく、道の駅しょうなんが間に入り調整することで、スムーズな運営を目指していく。	
【取り組み例】 職員による援農 2024 年より、道の駅しょうなんのスタッフ 1 名が、農家の要請に応じて、農作業のサポートを実施。これまでに、大根・かぶ・ネギ等の収穫、圃場管理等の農作業サポートを行った。今後は、援農人材を増やすべく、援農を進めていくための仕組みづくりに着手していく。	

施策 1－7 後継者育成	重点 項目
交流会や勉強会等、これからの手賀沼の農業を担う若手農家に刺激を与えるような企画を進めていく。若手農家の取り組みの積極的な PR や、販売促進イベントを実施する等、若手農家の顔が見える店づくりを目指す。また、婚活イベント等、後継者の育成につながる事業にも取り組んでいく。	
【取り組み例】 手賀沼の農コン FARMERS PARTY 出荷者会からの提案で 2025 年 3 月に開催。出荷者の独身男性 10 名、一般募集の女性 10 名で婚活パーティーを実施。プログラムは、いちご狩りや地元カフェでのスイーツタイム等、手賀沼の農業の魅力を伝えられる内容とした。	

施策 1－8 農業機械のシェア	
出荷者が抱える課題として、小規模経営のため農業機械が導入できず、手作業に頼らざるを得ない点が挙げられる。こうした農家に対して、道の駅しょうなんによる農業機械の貸出・シェアや、購入補助等による出荷者支援が有効である。	
【取り組み例】 自動抑草ロボットのレンタル 田んぼの雑草対策の 1 つとして、自動抑草ロボットを道の駅しょうなんが購入し、希望する農家に貸し出す仕組みを検討している。まずは 2025 年度から、モニター農家の圃場で実験的に使用し、効果や可能性を検証する。また、アシストスーツのレンタルも検討している。	

基本方針① 農家と共に発展する（農業に対する取り組み）

施策 1－9 出荷農家の拡大	重点 項目
通信の作成やSNSでの発信等、出荷者会としての取り組みをしっかりとPRすることで新たな出荷農家、新規就農者が参画しやすい環境を構築していくことが重要である。	
【取り組み例】手賀沼だより 毎月発行している手賀沼だよりでは、定期的に出荷者を取り上げPRを行っている。 また、出荷者にも配布しており農家同士が情報を共有する機会にもなっている。今後は、出荷者向けの通信等、新たな媒体も検討していく必要がある。	

基本方針② 農業の未来に貢献する（農業に対する取り組み）

施策2-1 農業体験プログラム	重点項目
農家と触れ合い、新鮮な農産物のおいしさを味わってもらうことで、農に関心を持つ市民が増え、知産知消が推進される。手賀沼エリアでは、農を楽しむライフスタイルの入口として農業体験プログラムを推進していく。道の駅しょうなんは、受け入れ農家の紹介、企画・運営のサポート等により、農家や民間事業者が継続して取り組んでいけるよう後押ししていきたい。	
【取り組み例】農業土 地元農家が中心となり、年間を通して、様々な農産物の収穫体験を実施。協議会として広報や企画の支援を行ってきた。「手賀沼ブルーベリーサマー」や、「はじめてのはたけ」といった企画とも連携することで、お客さんが双方の企画を行き来し、農業プログラム全体の活性化につながっている。	

施策2-2 食育プログラム	重点項目
将来の農業を支える子どもたちに、早い段階から地元の農業や、地域の食に興味関心をもってもらいたい。これまでに実施してきた「はじめてのはたけ」などのプログラムを展開し、子どもたちが土にふれ、農家と出会える環境を構築していくことが重要である。	
【取り組み例】はじめてのはたけ 未就学児向けの収穫体験プログラムを2023年より実施。畑での収穫体験と、道の駅しょうなんでの調理体験を組み合わせることで、食への興味を持ってもらうことを目指す。2025年度からは道の駅しょうなんの予算で年4～5回実施していく。	

施策2-3 援農の仕組み構築	重点項目
手賀沼周辺では既にボランティアによって支えられている栽培プロジェクトや、市民団体が再生した農地等がある。農・食に関心のある市民の力を生かすことで、新たな農地活用が見出せると考えている。援農ボランティア制度の構築や、援農スクールの開校等、市民の力を農業に取り込んでいく仕掛けを検討していくことが重要である。	
【取り組み例】市民団体のサポート 市民団体が遊休農地の再生するプロジェクトを、協議会で支援してきた。市民団体のメンバーが、農業土・収穫体験のボランティアスタッフになる等、地域の農業に関わるきっかけになっている。また、メンバーの1名は、個別に農家でのボランティアを行いながら、新規就農に向けて準備をしている。	

施策2-4 営農へのステップの提供	重点項目
援農支援等の先に本格的に農業に取り組む・関わる人材が現れてくる。営農サークルの支援制度、新規就農者の支援制度等を、道の駅しょうなんとしても検討していく。新規就農者に対しては、出荷者が指導・教育をしたり、直売所スタッフとして働きながら土台づくりをしたりと、道の駅しょうなんだからこそのサポートが求められる。また、道の駅しょうなん自体が農業生産法人を取得し、農産物生産に挑戦する可能性も検討していく。	
【取り組み例】未利用農地とのマッチング 農家から使っていない農地活用や果樹園継承の相談がよせられることがあり、新規就農希望者や、拡大を希望している若手農家に紹介している。一方で、こうした相談は農家間で個別にされることが多く、道の駅しょうなんとして情報を把握・ストックしておく仕組みを検討する必要がある。	

基本方針③ 手賀沼のファンをつくる（地域に対する取り組み）

施策3-1
地域情報の収集

重点項目

旬の農産物の情報、周辺エリアでの取り組み、地域の事業者の動向、自然環境の変化（花の開花、紅葉等）といった、地域の細やかな情報が集まるプラットフォームを目指す。道の駅しょうなんに情報がある集まることで、来訪者への情報提供の質が上がるだけでなく、地域の事業者との連携や、企画の連動がスムーズになり、地域としての魅力向上につながる。

【取り組み例】 手賀沼コンシェルジュ

手賀沼コンシェルジュは全員、近隣に住んでおり、日々の暮らしの中で店舗や施設を利用している。取材だけでなく、日常生活の中で収集された地域の細やかな情報は、魅力的なものであり、組織としてストックする仕掛けが重要である。

施策3-2
メディアの運営

重点項目

HP や SNS 等で地域の情報発信に務めていく。道の駅しょうなんのインフォメーションセンターを最大限活用し、予算的にも人材的にも効率よく取り組むことが重要である。また、地元の事業者から協賛等を得ながら新たな媒体や情報発信に取り組んでいくことも重要である。

【取り組み例】 teganuma weekend

協議会として、HP や SNS で情報発信している。道の駅しょうなんのアカウントでは発信しにくい地域の情報もteganuma weekend で発信することで補完できている。周辺事業者との SNS での連携もでき地域全体の魅力を伝えることが可能となる。

施策3-3
パンフレット・冊子の作成

「TEGA LOVE」や「手賀沼だより」等の既存の媒体をベースに、道の駅しょうなん来訪者が手にとって持ち帰れる情報提供に務めていく。今後は地元の事業者から協賛を得ながら新たな冊子の作成に取り組んでいくことも重要である。

【取り組み例】 TEGA LOVE

2023年3月に手賀沼のガイドブックとして発行。この企画を機に多くの店舗とのネットワークが構築できイベントでの連携等が生まれている。1年半で4万部を配布しており、情報発信として大きな効果があったと言える。好評であったため、2025年3月に2万部増刷している。

施策3-4
てんと棟活用イベントの開催

「FARMERS YOGA」や「てんと星空観察隊」といった、地元事業者と連携し、無理なく持続できるコンテンツを企画していくことが重要である。道の駅しょうなんに通いたくなる、手賀沼にまた行きたくなる、魅力的なプログラムを展開していく。大規模な集客イベントをたくさん開催するのではなく、道の駅しょうなん来訪者の滞在時間延長、満足度、消費額増加につながるよう、小規模でありながら効果的なイベントを実施していく。

【取り組み例】 FARMERS YOGA

農家の発案でスタートした企画。2024年で3年目を迎え、持続的な体制が構築できている。受付・準備等、当日勤務している手賀沼コンシェルジュが対応することで、開催予算を最小限に抑え、徴収した参加費で無理なく開催することが可能となった。

基本方針③ 手賀沼のファンをつくる（地域に対する取り組み）

施策３－５

水辺空間を活用したイベントの開催

水辺に立地する道の駅として、のんびりした親水空間を楽しめる時間を提供することで、**滞在時間の延長・新たな価値の創出**を図る。ハード整備に関しては、柏市が検討・推進していくが、手賀沼に面した施設として手賀沼の環境に関心をもってもらえるよう、**水辺の親水空間や憩いの空間づくり**に協力していく。

【取り組み例】 ミズソラパーク

道の駅しょうなんに隣接する棧橋や緑道を活用して2024年に開催。道の駅しょうなん来訪者向けの水上アクティビティや、緑道空間を活用したキッチンカーの営業等、実験的に取り組んだ。2025年度からは、商工観光課が「かわまちづくり計画」の策定に向けた調査・検討・協議を進めていく。

基本方針④ 地域の回遊拠点となる（地域に対する取り組み）

施策４－１

地域回遊型イベント

「手賀沼いちごスタンプラリー」や「手賀沼ブルーベリーサマー」といった**地域を巡る企画**を率先してリードしていく。道の駅しょうなんが予算を全て負担するのではなく、参加店舗からの参加費や協賛金等、**地域の事業者の積極的なアクションを引き出す**姿が理想である。

【取り組み例】 手賀沼いちごスタンプラリー

2022年より毎年2～3月に実施している、周辺のいちご農園と飲食店を巡るスタンプラリーである。スタンプラリーの参加をきっかけに、いちごの新メニューを考案する店舗も多くあり、農産物のPRにもつながっている。また飲食店と農家が直接つながる機会にもなっており、事業者同士のネットワーク形成にも寄与している。

施策４－２

交通アクセスの改善

手賀沼エリアに人を呼び込むためには、交通アクセスの改善が必要である。自家用車を持たない市民にアプローチするためには、**柏駅や柏の葉エリアからのシャトルバスの検討、レンタサイクル等のシェアサービスのさらなる活用**が求められる。都内からの誘客においても**公共交通を活かしたアクセス方法の確立**が求められる。レンタサイクルに関しては、我孫子市のサービスとの連携・連動が求められる。

【取り組み例】 シャトルバス

2021年11月末まで、道の駅しょうなんーJR柏駅西口間の無料シャトルバスを運行していた。シャトルバスの再開を求める声が聞かれる一方、大きな予算が必要な取り組みであり、検討が必要である。

施策４－３

他地域との連携

北柏エリア、奥手賀エリア、我孫子エリアでも地域活性化に向けた取り組みが進められている。**エリア間同士で情報共有し、イベント等の連携**を図る姿が求められる。道の駅しょうなんとしては、**インフォメーションセンター（手賀沼コンシェルジュ）を活用**し、情報を把握すると同時に、**各エリア間の情報共有が円滑に進むよう機能**することが重要である。特に、手賀沼の玄関口である北柏エリアとは、連携を強化し**回遊性を高める**ことに注力していきたい。

【取り組み例】 テガヌマ・ウィークエンド

手賀沼フィッシングセンターの活性化を目指し2018年より実施。イベントを通して活動団体が増え、団体同士のプラットフォーム「ヌマベクラブ」が発足。勉強会等を開催しながら、情報共有やイベントの連携を進めている。ここでの議論が「手賀沼スクールヤード」の取り組みにも発展している。

基本方針⑤ 手賀沼の環境に目を向ける（環境に対する取り組み）

施策5-1

道の駅しょうなんでの展示・啓蒙

市民に手賀沼の環境を広く知ってもらうために、**展示や啓蒙活動**を積極的に行っていく。**つばさ棟ロビー**には可動式テーブルやラックが設置してあり、レストランや店舗利用者の目にふれる展示場所となっている。手賀沼エリアには環境保全活動をしている市民団体が多数あるため、活動発信の場として道の駅しょうなんを活用できることを周知していきたい。

【取り組み例】 つばさ棟展示

通年で「手賀沼スクールヤード」の環境学習の様子を展示している他、企画展として市民団体の活動紹介展示、地域の伝統行事紹介等も実施している。また、芝生ひろばでも、写真展示イベント等を実施しており、活動内容や団体に応じて、道の駅しょうなんの各施設を活用していくことができる。

施策5-2

環境教育プログラム

重点
項目

「手賀沼スクールヤード」「ミライいのち池」「ヌマベの楽校」といった**教育プログラム**や、**谷津田・里山の保全活動のサポート**を行っていく。道の駅しょうなんとしては**農業分野での環境学習コンテンツを提供**すると同時に**大型バスの受け入れ、休憩場所の提供**等、小学校受け入れの際の協力も求められる。

【取り組み例】 手賀沼スクールヤード

道の駅しょうなんとしては、農業をめぐる環境を知ってもらう役割を担い、小学校の直売所見学を受け入れている。また、農業体験プログラムにおいては、出荷者の紹介、出荷者の体験受け入れサポートを行っている。

施策5-3

水辺の拠点活性化

水辺の拠点と位置付けている「**手賀沼フィッシングセンター**」での**環境保全活動、啓蒙活動**に取り組んでいく。平成28年より、交流人口・関係人口の増加を目的に「手賀沼フィッシングセンター」を整備しており、整備後の**ビオトープや芝生広場を活用**し、環境保全推進に寄与していくことを目指している。

【取り組み例】 ミライいのち池

手賀沼フィッシングセンター内のビオトープを「ミライいのち池」と名付け、毎月生きもの観察会を開催し、観察するだけでなく、生きもののおすみを増やすためのワークショップも実施している。これまでに、水路の造作や魚道の設置、稲の栽培等を試みている。

施策5-4

カーボンオフセットの推進

廃棄食品の堆肥化や、**農地での炭素固定**等、**地域全体で取り組めるカーボンオフセット**の取り組みを検討する。カーボンオフセットに積極的に取り組む企業も増えており、そういった**事業者と連携**しながら展開していく。道の駅しょうなんとしては、**出荷者への堆肥の配布**や、**廃棄野菜の収集**等、農家にとってメリットのある取り組みにしていけることが重要である。

【取り組み例】 堆肥工場との連携

道の駅しょうなんの関連会社が堆肥工場の建設計画を進めている。そこでできた堆肥を、希望する出荷者に配布する取り組みを検討中。堆肥の配布は、工場側が運搬・散布・耕運する仕組みを検討しており、出荷者の農作業負担軽減にもつながる可能性がある。

おわりに

令和7年度より、この戦略プランに基づいて、手賀沼エリアの農業振興、地域活性化に取り組んでいく。なお、この本戦略プランの改訂は、下記の検討会の実施により、議論・策定を行った。

【検討会】

第1回 令和6年10月22日(火) 13:00～14:30 会場：道の駅しょうなん	【議題】 ・手賀沼エリアの現況や課題について ・基本方針の検討（農業分野）
第2回 令和7年1月23日(木) 15:00～16:30 会場：道の駅しょうなん	【議題】 ・戦略プランの構成について ・基本方針の検討（観光・環境分野）
第3回 令和7年3月14日(金) 15:00～16:30 会場：道の駅しょうなん	【議題】 ・基本施策の検討 ・戦略プラン全体の確認

【検討会メンバー】

【所属】	【役職】	【氏名】
道の駅しょうなん	代表取締役社長 駅長	江口 仁 木村 美穂
道の駅しょうなん・出荷者会	会長 副会長 副会長	勝矢 久 坂巻 儀治 秋谷 哲男
柏市観光協会	事務局長	中島 貴洋
北柏楽しいことやっちゃおう プロジェクト	代表	小齋 隆宣
手賀沼アグリビジネスパーク 事業推進協議会	会長 副会長 沼南ファーム 鹿倉農園	染谷 誠一 油原 祐貴 橋本 英介 鹿倉 孝男